產婦人科むかしむかし

第三集

目次

第三集発行に当り……教育長　長谷川泰雄

表紙題字　平野諒栄

第一部（民話篇）

字名（あざめい）の起り……飯島忠雄―2
源清麿の千鳥槍……飯島忠雄―12
昔と今
見たこと聞いたこと（一）……瀬戸藤兼―15
鈴鹿明神の祭礼……飯島忠雄―19
出開帳……飯島忠雄―21
星谷寺の七不思議……角田俊久―23
桜田物語……角田俊久―25
座間動物誌Ⅰ
心岩寺の狐と狸……白井光信―27

第二部（資料篇）

夷参と座間―市名の由来……鈴木芳夫―37
宗仲寺開山源栄上人伝……飯島忠雄―42
日本刀学院の創立……飯島忠雄―46
相模野基線南端点……角田俊久―48
明治五年座間宿村議定書……飯島忠雄―50
「座間」という姓……鈴木芳夫―53
刀匠周広伝……飯島忠雄―56
座間市内の寺子屋のはじめとその師匠……鈴木芳夫―62

付録　座間市略年表・座間市字名旧図

座間むかしむかし第三集発刊に当って

座間市教育委員会教育長　長谷川泰雄

昔の人は自然に順応して生活したが、近代人は自然を人間に順応させようと努力をするその結果度が過ぎて係争事件が毎日ニュースとなって報導されている。

昔の事はみんなだめ、役に立たないと思っている市民が多くなって来た折「座間むかしむかし」の続版が発行されたのは、渇をうるおす冷水を得た感がいたします。

座間から逃げたのは、スミレ・タンポポ・たにしだけではありません。私達の毎日に使う言葉でも、どんどん姿を消しています。

白井さんの書かれた狐や狸のお話し等夏の夜の物語りとして永く後世に伝えたいものです。

こうした話をきくと近代人はすぐ「それは妖怪変化のしわざではない心の迷いだ」位の薄っぺらな解釈で終る。科学的に究明すれば当時の社会情勢が、どのようなものであったかよくわかる筈です。

まだまだいろいろな昔語りが座間市内にはたくさんあると思います。次号に皆さんがお書き下さるようお願いいたします。

昭和四十九年三月一日

第一部（民話篇）

字名（あざめい）の起り

飯島忠雄

座間市内には変った字（あざ）名が沢山ある。昔から言い慣されたものであるが、現在の市内地図には古い地名が大分抹消され、大字だけが重点に取り上げられている。市政の執行上是等の字名もやがて抹消されて、新しい町名が生れて来る可能性があるので、珍しい字名だけでも記録して置く必要があると思い、部落別にその一部を取上げてみた。

座間入谷

入谷　公式の大字名は座間入谷であるが、普通は入谷と云っている。入谷（いりや）は正確には「いりがやつ」である。山間の低地の集落という地形から来た名称で、「入谷」の大字名は谷戸部落が発祥と思える。

新戸谷戸　大体今の明王地区である。昔は新戸村の飛地の谷戸だったが、明治二十二年新町村制施行に伴い、旧座間郷七ケ村のうち、磯部村と新戸村が分離して新磯村となった時新戸谷戸は他の座間入谷、座間宿、栗原、新田宿、四ッ谷の五ケ村と一緒になり、座間村を形成した。その頃は十戸ぐらいで、回りをかこんでいた座間入谷の一部とされた。

入り　筆者が住んでいる字で　円教寺の西側座間小学校北側、座間下宿の東側である。座間宿村下宿と座間入谷村長宿とが入り合っている処から「入り＝いり」と云った。大正期の古老は「入り村」と云ったものだ。

長宿　番神堂の泉から流れ出す小川の両側に農家が建ち並んでいるが、天保年間には僅かに七戸しかなかったと云われる。百五十年間に七十戸以上に増えた。増加した人達は皆天保年間の七家の子孫で、不思議にも外来者は戦前まではなかったが、戦後は十二世帯ばかりが仲間に入った。

狢谷戸　むじな谷戸である。ここは入谷分と座間分がこみ合っているが、今の文化福祉会館のある一帯である。昭和十二年九月に陸軍

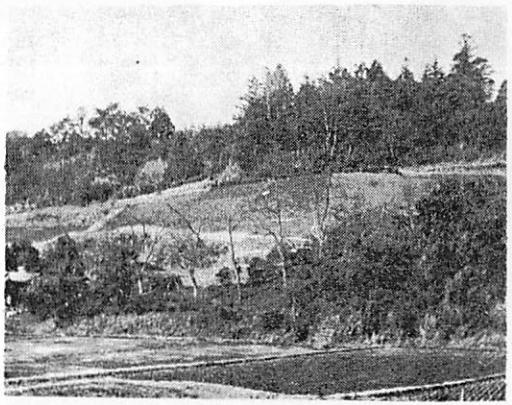
士官学校が東京市ヶ谷から今の座間キャンプの処へ移転する以前は、谷戸田であった。行幸道路は元は巾二間半の原町田に行く一本道で、座間、入谷、新田宿、四ッ谷の農家が芝原へ行く農道の幹線であった。狢谷戸というのは昔狢の穴が沢山あったからで、そこに棲む狢たちは夜の通行人を化したという。

蛇穴谷戸　明王堂の座間キャンプの水道貯水池の南側の窪地で、蝮（まむし）の巣や蛇の穴が沢山あったので名づけたという。

本堂　座間の方から緑ケ丘の方へ上ってゆく農道の小田急線の踏切をこえると正面に見える丘である。ほぼ百メートル四方の山林であるが、もとは星谷寺の本堂があったところでここにあった星の谷観音堂は火災にあい、寛延二年（一七四九）に現在地に移った。星谷寺（観音堂）の創建は平安時代に遡るものとみられ、まだ多くの謎のある処である。

明王堂　本堂の東側で今は座間キャンプの水道貯水地となっている。もとは明王堂があったが、星谷寺（観音堂）が今のところへ移ってからは廃れた。単に「明堂」とも云った。

大坊谷戸　本堂と明王堂の南側の谷である。星の谷観音堂が本堂にあった頃、観音堂の管理者の「大坊」が住んでいたところで、大坊は何百年間も、代々観音堂や明王堂を管理し参詣者のため祈禱していた山伏の修験（しゅげん）であったが、観音堂が持宝院と合併して移転した時に廃止した。その子孫は加藤定



本堂（山）・手前は大坊谷戸

雄氏である。

清蔵坊　南光坊　羽根沢の小さな字である。星の谷観音堂の別当の修験大坊の末寺であって江戸時代は修験堂であった。詳細は不明。

小松原　明治三十二年頃、皆原の高松という人が開拓を始めたので、高松新開とも皆原新開ともいったが、芥川松太郎さんと野口高吉さんが住みはじめたのは明治三十八年で、つい十数年前までは二十数戸しかなかった。

小松原開拓碑
昭和9年建立

芝原　今の相模台から小松原方面へかけての一帯の総称。江戸時代は御領（徳川氏の領地）で、一面に薄が生い茂げった秣場であった。嘉永年間から明治初年までに、座間郷のうち現在市を形成している五ケ村（新戸谷戸の項参照）が、幕府の許可を得て、村別に区域を決め、協同開墾をし、畑とした地域である。

奥野　「おきの」といい「沖野」とも書く。芝原のうち最も東の方で、座間の部落からは最も遠い地域をいう。この最北の部分の小田急相模原駅付近は、明治十三年頃から、座間河原宿の鈴木という人をはじめ主に座間の人たちが、開墾をはじめた。住んだのは駅北側の相模原市内で、座間から原町田へ行く道路の両側であった。この辺は雑木林と人の背丈以上のすすきが生い茂った原で、狐などがすんでいた淋しいところであった。

鷹番塚　星の谷観音堂の前から県道座間長後線の坂を上って行ったところの右側で、住宅地になっている。江戸時代の初期には相模野は将軍家の鷹狩場であって、ここには鷹狩りのときの見張り用に、塚が築いてあった。

羽根沢　座間駅東方の丘と丘の間の谷間。細長く続く丘の間の沢なので、「うね（畦）沢」

といったのが訛って、羽根沢になったというが、実際は「はに土」が出るからだろう。

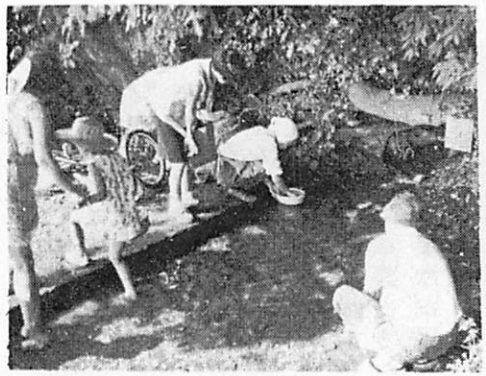
梵天　静ケ丘市営住宅の北側の沢渕一帯をいう。ここは中谷戸の牛王の森の北側だが、昔梵天と云ったのは、安永七半造立の位牌状の梵天の石像があるからである。梵天は婬楽にふける者を戒める神といわれている。

地蔵前　今の星の台の北半部を云った。大門坂の右側の台地の上で、坂を上り切った右側に道祖神と男女の神を浮彫にした和合神とがある。昔ここに地蔵さんが立っていたので字名が起きた。区画整理をしたので字名は消失してしまい、児童遊園地の名として残っている。

皆原　古い時代には「南原」と書いた。明治になって「皆原」と改めたが、何の理由で変更したかは不明。

根下　皆原の西側の崖下。崖下の根付である処から名付けた。

神井戸　「かめいど」という。根下の南端の清水が湧く所で、ここに水神を祀る処から名づけられた。井戸とは水の湧く所をいうのである。この清水で鈴鹿明神の御輿を舁いだ白丁を洗い清める風習がある。



神井戸

星の谷　星谷寺縁起の七不思議の内の「星の井」から出た地名である。星の谷観音が本堂山にあった当時、夜空の星が池の水に映ったという伝承から星の谷となったが、星の映った井戸とは、明王堂下という字にあった溜池のことで、谷戸田の水溜のあった窪地の名が

起源である。

大門　星の谷観音堂の大門の前通りをいう。星の谷の観音さんが繁昌した江戸末期から大正期までは、この大門通りで草競馬をやった大門通りは皆原の鈴木清久さんの前までである。この通りに面している遠藤昇之助さんの先祖は丸屋という宿屋で、鈴木清久さん方は内田屋という酒屋だった。星野浜次さん方もその頃からの商店である。

鮒堀　座間電報電話局のあたりから、番神水と谷戸川と龍源院の水とを集めた用水堀が一直線に南下していた。この用水堀を鮒堀と言って、どじょうや鮒等が沢山いて、私が子供の頃はよく鮒を取ったものである。

大縄道　座間市役所脇から電報電話局脇に至る東西の道、今は県道座間長後線の一部である。この道は江戸時代、耕地、道路、水路などを測量する検地の際に基準となった道路で興道とも云った。（鈴鹿明神の祭礼参照）

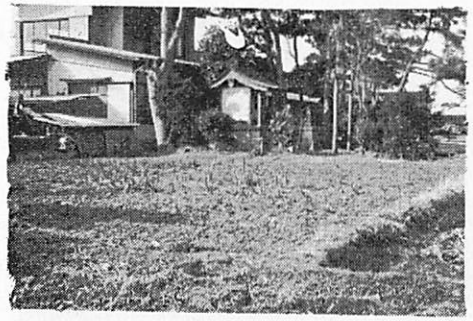
興巻　座間小学校の敷地がほとんど全部この字である。鈴鹿明神の大祭の名物は興が大あばれにあばれることで、特にこのあたりを興がねる時よくあばれたので「興巻」と名づけたという。「巻」とは興が荒れ狂ってねることの形容である。

川駒　小田急座間駅東側にある小田急社員アパートの後側の丘の中腹を言う。「かごま」と云う人もあるが、理由はわからない。昔、牛馬の死体を埋めたり、旅人の死者を葬ったりした村の共有地であった。

蔵屋敷　昔の各村にある。年貢米を一時収納しておいた倉庫のあったところである。正式の字名として残っているのは座間入谷だけで鈴鹿と下も鈴鹿の中間、心岩寺の参道と県道座間長後線との間で、今はバイパスが斜に縦断している。ここに二棟の倉庫があったが享保五年（一七〇八）に廃止された。

ついでだが、栗原では蔵屋敷は下栗原の竜蔵様の南側、座間では六反（ろくたん）の国鉄宿舎のあたり、新田宿では中央の道路の北部の西側、通称池端（いけばた）の稲荷様の傍、四ッ谷では、中央部の東側で、旧道と現

県道とにはさまれたあたりである。

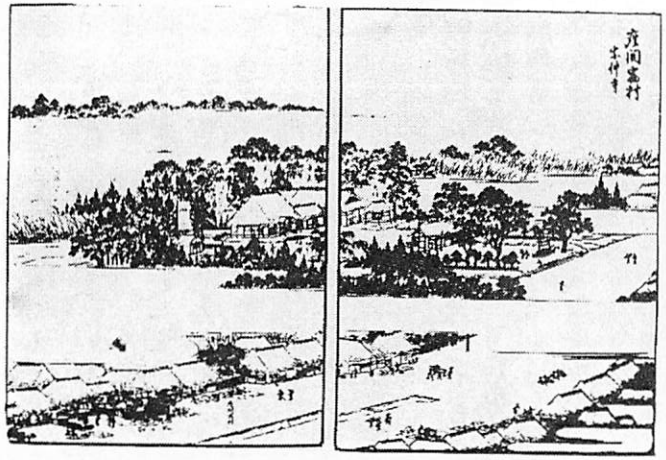


新田宿蔵屋敷の跡　—手前の畑—

後方は岩岡稲荷・年貢米は舟で相模川を下し、須賀から江戸へ回漕した。

鈴鹿　市役所東側の鈴鹿明神の周辺から梨の木坂下まで。一般には、伊勢の鈴鹿に関係づけたり、鈴鹿明神があるからと考えられているが、東北地方では、泉のことを「すず」という事からすれば、前は五ケ所（今は三）も清水の湧く所があったためだろう。

泉水　座間「せんずい」という。座間神社の境内から何千年も前から清水が湧いていた。この清水を、上宿の宗仲寺の前の八百輝さんの前までトンネルを掘抜いて流し、座間宿村通りの人達は洗い物の水として使っていた。左右両側の人が使えるように、道路の中央に川を



江戸末期の座間大通（中央が川）

相中留恩略記（有隣堂発行）より

掘ったので、八王子往還はこの部分だけ道が二筋になっていた。明治中期に東側に川を掘り替えて水を流し、八王子往還を一本道としたので、座間宿通りだけ道巾が他より広いのである。この清水の湧いていた付近を「泉水」というのである。今ではその水源池に水が湧なくなってしまったが、跡は残っている。

鮎の道　下宿の小俣薬局の際を中河原に出る道。江戸時代は相模川の鮎を江戸と八王子に送り販売したが、此の道を鮎を担いで送った処から字名となった。

鍛冶屋村　「かじゃむら」という。下宿の鈴木房吉さんの屋敷から野島諭さんの屋敷へかけた一帯である。中宿の鈴木周広さんや鈴木房吉さんの先祖などの鍛冶工が住んでいて、刃物や農具や建築用具などを作る工場があった。嘉永二年に出火して鍛冶場が全焼したので廃業したという。

鷹匠橋　河原宿の南から新田宿に行く道の鳩川に架けられた石橋である。鷹番塚の項で述べたように、座間地域で鷹狩りが行われた時、鷹匠たちが往来した橋であったので名づけた鳩川を改修するまでは、太い丸木の一本橋だった。

田中　公民館の本館のあたりから入谷バイパスの丁字路までの県道厚木町田線の両側。座間電報電話局の工事の時、土師器、須恵器の破片が出土した。それによれば、千三、四百年前からここには部落があったらしい。

油面　座間小学校の西側で用水路までの間である。其の村の総鎮守で由緒の正しい神社の燈明料として、官税を免除された神田と同じく社領を云うのである。河原宿と新田宿の間に伊勢新田という字（あざ）がある。この二つの字名は、河原宿の太神宮さんの神領で、何れも免租地であったことを示している。

牛池　「うしゅーけ」と発音しているが、語源は「牛埋（い）け」であろう。何百年か前相模川の流れた跡で、この一帯は地下水が押上げる軟弱な湿田であった。今では、砂利採取で相模川の河床が低下したため、地下水位も下り、水は湧き出していない。国鉄線入谷

駅から河内住宅へかけての西側一帯である。

堂の前　座間電報電話局傍から新田宿へ行く道路の両側で、用排水路と国鉄線との間が、だいたいの地域である。今の国鉄線の河原宿踏切の傍に、大日如来と閻魔（えんま）大王の同居の堂があったことから起きた。この堂が七十年くらい前、野口徳重さんの前に落ち着くまでには三回くらい移転している。

鷺（さぎ）島　座間中宿から中河原へ行く県道座間関口線に沿った国鉄線の西側のあたりである。昔、田の中に少し高くなったところがあったが、夏になるとここに沢山の鷺が集まり、遠くから見ると、鷺の島のようだったという。訛って「さんしま」という人もあるが、風流なやさしい名である。

横町　座間大通りには直角に交わる何本かの小道がある。本来はそれらがみな横町であるわけだが、どういうものか、中宿から下宿にかけての東側の瀬戸留吉さんのあたりを「ヨコチョー」と呼んでいる。大通の西側の方では「西横町」と呼んだともいう。

新田宿

長安寺　新田宿の諏訪神社の北側、西中学校の西側で、もと長安寺という寺があったが、いつの頃か廃寺となり、檀家は新田宿の専念寺と座間の宗仲寺に分れた。土地は座間分だが、人が住み始めたのは最近のことだ。

四ッ谷　昔は「四ッ屋」と書いたもので古い文書にはみられる。田圃の中の部落名に谷の字を使うのは、地形から見て不審がある。実は古文書の通り「四ッ屋」であろう。何時の時代かに四軒の草分の宗家があって、永年の内に発展して部落を形成したものだろう。

榎戸　明治以前に鳩川から海老名市下今泉の田に水を引く水路の水門があった処。寛文（一六六一～七三）頃までは「松戸」といったという。ここの伝説は別な機会に発表したい

栗原

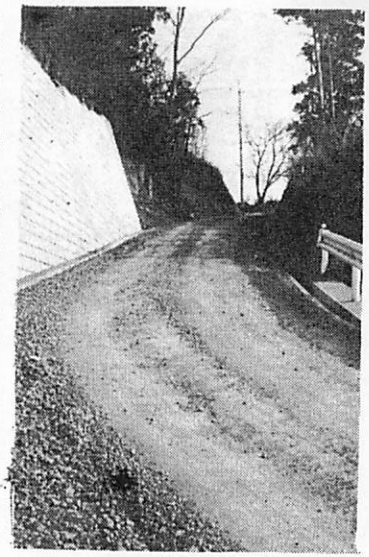
栗原　昔は「くりばら」と濁ったが今は「くりはら」と云う人が多い。地名の起源はわからない。古い部落は自久尻川の両岸にあった

高台に住んでいる人達は近世に分家したか低地から移ったものであろう。

大下　「おおじも」と云ったり「おおしも」と云ったりする。栗原の海老名市境の最南部をいう。一般に部落の上部を「上（かみ）」といい、中間を中屋敷などといい。南を「下（しも）」というが、とびはなれている処から「大下」と云ったものであろう。座間の上、中、下宿　或は四ッ谷の上、中、下と同意で、県下の古い部落の中には至る所に、上、中、下が残っている。栗原にも上栗原、中栗原、下栗原があり、「大下」はその下栗原の一番外れである。

小池　小池部落の最北部の白髭弁財天を祀るところに小さな池があったが、この池から地名が生れた。白髭弁天は文久二年に再建した棟札があるが、創建は古い時代のことであろう。小池には妙禅寺という寺があったが、明治初年に廃寺となり、その山門だけが入谷の竜源院に残っている。

巡礼坂　下栗原の竜蔵様の前から東の台地へ上る坂道。昔巡礼の往来が多かったという。花嫁はこの坂は通らず、回り道をした。改修前はたいへん急で狭かった。江戸最末期までは、次にのべる「いっぺん窪」の泉の縁を通っていたので、もっと急だったという。ここに四基の横穴（古墳）の跡があった。



現在の巡礼坂

いっぺん窪　巡礼坂の南側の目久尻川の谷が少し入り込んだところ。清水が湧いているが水量は最近大部減った。意味はよく判らない。昔、ここに、一平と言う人が住んでいたからで、「いっぺい窪」だ、と言う人もある。

にっぺい堂　巡礼坂を上り終ったところの右

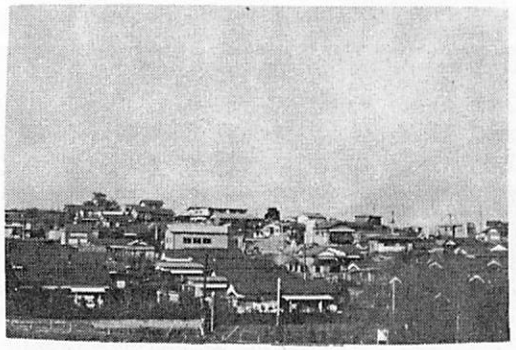
側で、電々公社宿舎の北側である。いっぺい堂という人もある。畑の中に何か建物があったらしい跡があるほか、何もわかっていない

八軒庭　現在の大塚本町駅の北側、目久尻川のあたりまで。八軒の部落があったからだろうが、今は何戸になっていることか。

蟹ケ沢　本来は座間中学校東側の谷であるはずだが、通称としてはその両側の台地上も含んでいる。公的な字名としては、谷底の部分は「小池谷」で、両側台地上は座間分と座間入谷分とが入りまじっている。谷底は水田で両側の台地の裾からはきれいな水が湧いていて、二筋の小川となっていた。この小川には水芹が生えていて、蟹やエビが沢山いたところから名づけられた。両側の台地上には縄文遺跡がある。

立野台

鷹の峯　今の立野台の中央を東西に走るバス通り　北側の高地。明治になるまでは「立野山」と呼んだという。文献によると、名寄集にある藤原為家（鎌倉中期の歌人、定家の長子）の歌「さがみなるたち野の山のたちまちに君にあわんと思はざりしを」の中の「たち野の山」が、この山だというが、この歌は夫木和歌抄の中のよみ人知らずの歌とする文献もある。立野台というのはそれにちなんで付けられたのだが、そうだとすれば「たち野台」と呼ぶべきだろう。なお立野橋というのが上栗原の今のグリーンタウン内にあった。」



現在の立野台

もとの鷹の峯の遠望・宅造により地形は多少変った

相武台

相武台　昭和十二年十二月二十日、天皇陛下が当時の陸軍士官学校卒業式に行幸された時命名されたもので、本来士官学校敷地と付属の練兵場だけを呼ぶものとされた。だから小田急線の駅名も「相武台前」なのである。もっとも「相武」は相模国ができる前の千三百年も前は相模川流域の国名であった。

源清麿の千鳥槍

飯島忠雄

昭和三五年三月末に海老名市国分に住む刀剣研究家池田末松氏と石井昌国氏方で会った際、栗原の大工森田彦蔵さん方から清麿の千鳥槍が見つかったと云うので、半信半疑に思った。半信半疑というのは「偽物」が真ッ先に考えられる。次に名工清麿の真作など座間地内に有る訳がないというのが私の頭の中にあるので、どうかなと思ったのである。しかし池田氏は神奈川県の刀剣審査員、石井さんは全国の重要刀剣の審査員で、両者共日本の刀剣会では若手の精鋭であり、一刀たりとも見誤る刀はない筈の研究家であるので、私はかつがれているのかなと思ったり、清麿の真作が座間にある訳がないという先入感で迷ったが、行って見ようという気になって、後日自転車で出掛けた。

折よく森田さんは在宅で、早速拝見した。銘文を見なくても清麿の真作である。槍は柄も完備していていささかの補修の跡もない。柄は樫柄、長さ九尺、銘「環源正行」、清麿若打である。穂は長さ七寸五分、両脇の翼に当る穂の長さは四寸で、穂先が刀刃になってやゝ上向である。刃文は清麿の得意とする丁字乱れ、最近の研だがよく研げていて崩れた個所もない。匂いは深く白い刃文に鍛肌も密で、申分のない出来である。この作は清麿の若打であるが、沸（にえ）もこまかくやゝ黒澄んだ鉄味であって、小振りながら精気の漲

ったもので、貴重な槍である。

この槍がどうして森田家にあるのか不思議に感じたので、同家と槍との関係を伺いに参りますすといって一たん帰宅して、四、五日後にゆっくりと、森田氏の先祖の話を聞かせて戴いた。森田さんは、わたしの家のことはわたしが話すから、飯島さん槍を鍛えた刀鍛冶の方を先に話してくれませんか、といわれたことから、清麿の話から始めた。

清麿の出身地は信濃の松代藩で、下士の子として生まれた。兄を正雄といい刀匠であった。銘に鈴木正雄と草書で切っているので、姓は鈴木であった。兄が先に松代藩の刀工に召抱えられたのである。清麿の名は正行で、清麿は刀匠の名である。清麿は相州飯山の刀匠眼竜子寿隆の弟子になった。寿隆は鳥取の藩工の浜部寿格（としのり）という刀匠の門人であった。寿隆は相州飯山の出身であるが信州松代藩に仕えた関係から、清麿は藩工の寿隆に弟子入りしたものである。

松代藩は華美な出来の刀は好まず、豪荘な切味本位の刀を藩臣に持たせたので、刀鍛冶を召抱えるには、人間より刀の試験を先にした。正雄を藩工に召抱へる時の試験は、赤銅と孟宗竹を五七回も切った上に石に叩きつけて、曲りや刃こぼれの状態を検討し、更に兜に斬り込んで鉄と鉄との硬度の試験をした。そして藩工に採用されたのである。

清麿の作は一見して名工と知れる刀だが、師匠寿隆と兄正雄の刀は名工の作とは思えない程野暮で豪荘である。反りが浅く刃文も大きく地鉄の冴えはなく美しさのない重（かさ）ねの厚い刀である。その代り試斬りに掛けると凄絶な切味を示す。明治の二銭銅貨を五枚重ねても、片手上段の打下しで楽々と真二ッに斬れる。孟宗竹三本を束ねたものを一と打ちで切断する程物凄い切味を示した。この試切りは昭和十五年に陸軍士官学校で高野助三郎範士が試切りをした時実験したもので、あまりにも切味が良い刀なので、その刀を拝見させて戴いたら、鈴木正雄作の二尺四寸の豪刀で、少し刃マクレが出来ただけで、曲りな

どはなかった。

高野先生は私に鈴木正雄という刀鍛冶はいつ頃の人でどんな鍛冶だか知っていたら生徒に説明してくれませんか、と言われたので私は恐縮したが、正雄の刀匠談を五分ばかりの時間で説明した。見学する士官候補生三百人ばかりが神妙に私の話を聞いてくれたことを今だに忘れられないのである。

清麿は江戸に出て鍛冶を始めたが、当時の江戸の名匠水心子正秀や直胤の長所を学び、正秀、直胤、清麿は江戸三作と賞讃されるようになり、清麿は下谷に住んで居た所から、下谷正宗と云われる程の鍛冶となった。

清麿は当時の勤王思想にかぶれて志士と交わり、妻子や弟子を捨てて江戸を逃れていたが、幕臣の追跡を逃れることが出来ず、長門で自刃して果てた。刀剣界では勤王刀工として清麿を賞讃しているが、清麿自身の勤王の業績は何も残っていないのである。

私も昭和二十三年に、一尺五寸ばかりの清麿作の脇指を一振り所持していたので、直ぐに真作だとわかったのである。清麿の千鳥槍は殊に少いもので、遺作中の珍品であろう。

森田さんの祖父は鈴木勘太夫という医者で前身は幕臣であり、彰義隊に入り、清麿の槍を振って官軍と交戦したが破れた。生残りの隊員は四方に散ったが、鈴木勘太夫は僅かの縁をたより栗原に落着いて医者を始めた。

男の子が柳次郎で成人しても医者にならず大工になった。その子が彦蔵氏で、清麿の千鳥槍が同家にある理由もわかった。柳次郎さんの代から鈴木姓より森田姓に改めた。

清麿の千鳥槍は徳川三百年の鎖国主義から脱皮して、維新の大変革を展開する前の、徳川氏に対する止めの一と刺しの鋭鋒であったかも知れない。

森田彦蔵氏現住所
座間市栗原三七九三
青木国彦 方
電話〇四六二ー五一ー五三五三

昔と今
見たこと聞いたこと

瀬戸藤兼

第一話　座間トンボ

此のトンボは座間以外には居ない、といわれていましたが、長宿の番神様の川にも居たそうです。

座間中宿の東の端の座間キャンプの崖下から、西側の鳩川まで通じる道路のはたに、巾三尺（一メートル）くらいの川が流れていましたが、その小川に生息していたのです。

体長は一寸（三糎米）弱、尾の先に毛のようなものが二本でていました。毎年五月になると飛び出し、最盛期は五月下旬から六月で夕方になると、川の上はトンボの群で、向うがかすむ程たくさん、飛んでいました。

此の川は、今の文化福祉会館や消防本部のあるむじな谷戸と云った処に、およそ三町歩（三ヘクタール）ほどの水田があり、その排水路でもありました。水源地は今の緑ケ丘の小田急線の下あたりで、もと士官学校の座間キャンプの北側の部分の中を通り、今の座間公園内の市営プールの下を流れていました。

そこにはおよそ二町（二百米）くらいの細長い谷があり、ここを「沢」と呼んでいました。その中程に、高さ一丈（三米）くらいの滝があり、夏、雨上りにここへ来ると、滝はドードーと大きな音を立てて、二間（四米）四方くらいの滝つぼへ落ちていました。上を見れば緑、足もとは清水、真夏とはいっても暑さ知らずの涼しさでありました。又その下流一町（百米）ほどのところに、山の井戸という清水が湧き出ていました。その付近から鳩川までの間が、トンボの住家であったのです。

昭和十二年陸軍士官学校の開校と共に、この小川は士官学校の下水路になり、河水は汚れほーだい、トンボの数は減る一方。間もなく下水は地下を通るようになり、川は無くな

座間トンボのいたところ

自動車の下あたりが谷川

りました。それと共に、トンボの姿を見ることも出来なくなりました。

ああなつかしい座間トンボよ、お前たちは何処へ行った。地下へもぐったのか、それとも亡んでしまったのか。

※ このトンボは川トンボというのが本当らしい。

第二話　座間本通り

明治の中頃まで、此の通りは、真中に巾一米ほどの川が流れていて、魚なども泳いでいました。（図は「字名の起り」泉水参照）

明治の始めまでは、鈴鹿明神の天王祭には、御輿が八月一日から一週間も出張され、皆お参りした。なかなか賑やかだったそうです

其の後、明治十一年ごろ、座間と座間入谷の部落が不和となり、座間入谷は御輿を取り

座間は明王堂、浅間様、おさる様、天神様等、土地付き五反歩（一五〇〇平方米）くらいを取り、結末を付け、それから、御輿が出張されなくなったそうです。

其の後、川は道の東側を流れるようになり道巾は五間（十米）くらいになりました。その道で四間（八米）四方の大凧を揚げました。民家へ落ちた時は、かなり迷惑をかけたが、よく揚りました。明治の末か大正の始めに、電燈が灯るようになって、大凧揚げは、部落の西方の田圃でするようになりました。

また此の通りには市が立ちました。十日市場と云って、毎月十日、二十日、三十日に開

かれました。中でも十日が一ばん賑やかでした。

大きな呉服屋が四、五店出張し、そのほかいろいろの商人はもちろん、見世物屋まで、出ていました。しかし、これも明治三十五年くらいまでで、その後はだんだんとさびれてしまいました。

註

明王堂　座間キャンプの貯水地のところにあった

浅間様　富士山公園の頂上にあった

おさる様　日枝神社のこと、富士山公園の南西の麓にあった

天神様　座間キャンプ野球場北東角あたりにあった

第三話　相模台の昔

此の所は、昔は一面の芝原であったのです江戸最末期の文久年間、座間部落の各戸に、古割（ふるわり）約二反、角割（かくわり）約二反、小割約七畝、計五反歩（〇・五ヘクタール）くらいが払下げになり、開墾して畑にしたのです。

今私の家で耕作している六一二番地あたりには、大きなグミの木があったので、付近を「グミの木」という地名で呼びました。

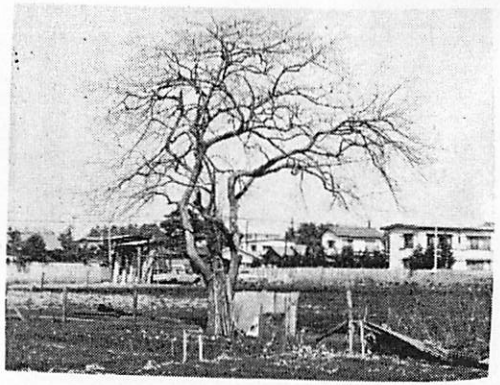
また旧座間分と新田宿分との境のたつ街道は「八里橋なし九里の堤（どて）」といって、此の道をたどってゆけば、藤沢から橋本までの間、橋を一つも渡りません。

相模野小学校の西側の小池窪の崖下に、三叉路があり、相武台の方から行って、右に行けば鶴間街道、左に行けば江戸街道です。鉄道のない頃、東京へ行くのには、この左の道を行き、長津田の辻で、青山街道（今の国道二四六号）に出て、渋谷から日本橋へ行ったそうです。座間から十四里（五十キロメートル）、婦女等は朝早く出て、夕方暗くなって着いたそうです。

この道の傍には雉の巣がたくさんあって、昼間見つけておき、夜になって捕りに行き、

親子もろ共生け取りにしたそうです。
雉は地面に巣を作るのですが、強敵は蛇で卵のうちから襲うのですが、蛇は人通りの多いところには住みにくいのです。ですから、道傍に巣を作れば、危険が少いわけです。
雉の雄鳥は蛇に巻かれても、羽を力一ぱい拡げると、蛇は千切れてしまうそうですが、雌鳥にはその力はない、という話を聞きました。

この相模台は座間で一番広い畑で、古割、北、中、南広野と分れていました。入谷の人は、今の日産工場のあたりから、小松原の方にかけて耕作していました。みな座間同様、部落の人で土地を分けて払下げを受けました。
たつ街道から東は新田宿分で、その南の方が四つ谷分の二ッ塚ですが、これらも同様に払下げてもらったのです。
この辺の畑に行くのは大変で、朝早く弁当を持って出かけ、昼食は畑の隅に植えた柿の木の下で食べましたが、そのうまさは今でも忘れられません。ただ暑い時は、持って行った水が足りなくなって困りました。帰りはまたテクテクと歩き、八時近く家に着いたものです。



畑の中の柿の木
相模台の北広野に残っている
根回り1メートル余

第四話　鷲（わし）さん

昔、新田宿に鷲さんと云う人がありました。六尺豊かのがっちりした人で、農業の外船頭もしていたそうです。
ある日、相模川原で四、五人の仲間と話をして居りました。そのうち、はるか向うへ、大きな一羽の鳥が舞い降りました。鷲さんはそれを見て、おれがひとはたきしてやろう、と云い出しました。外の人は鳥が余りに大きいので、よした方がいい、と云いましたが、聞きいれません。
鷲さんは舟竿を持って、鳥に気づかれないように、河原の低い所を歩いていって、鳥に近づき、その竿で一撃をくらわせました。しかし鳥はパッと飛び上り、見かすむほど高く上って行きました。が、急に中返りをして、鷲さん目がけて飛び降りて来るのです。けれども河原の事で、かくれる所もありません。やむなく、持っていた舟竿を頭の上で振り廻していました。そのうち、竿がうまく当ったとみえ、鳥ははたと地に落ちました。しかし鳥は六尺以上もある羽をひろげたまま、向ってくるのです。鷲さんは竿で払い払い後へ下るばかりです。
見ていた仲間は「これは鳥にやられてしまうぞ」と云っていましたが、怖くて助けに行く事も出来ず、見ているばかりだったそうです。
鷲さんはやがて畑に逃げこみましたが、そこは桑畑で、鳥は羽がつかえて、前え出られなくなりました。そこで鷲さんは竿を振ってその鳥を撲り殺しました。仲間もようやくほっとしたそうです。鷲さんはその鳥の首を持って肩にかつぎ、尾を引きづりながら、家へ戻ったそうです。
それから鷲さんは「鷲さん」と呼ばれるようになったのだそうで、本当の名前はなんと云うのか伝わっていません。

鈴鹿明神の祭礼

飯島忠雄

鈴鹿明神の祭礼は永い習俗の祭りで、毎年七月三十一日を宵宮として、本祭りは八月一日である。明治年間には五日間祭りをやったそうだが、あまり長い祭りのため、氏子の経

費が大変だというので、三日間に縮めた。戦前には鈴長（鈴鹿と長宿）一日、大門一日、皆原一日で、輿を二部落交互に先に上げる仕組であった。今年は大門に上げたら、来年は皆原に上げるという順序である。

現在は一日の本祭りで、自動車に輿を載せて氏子巡行をするが、戦前は前後左右に十八人の輿舁を三部落から出して舁いだものだ。十八名が互に押し揉みあって舁ぎ、肩を棒でこすって白丁は血に染まって居た。大荒れに荒れるので観衆は大喜びで声援した。戦前は徴兵検査に合格した若者が舁ぐのが慣わしであった。市役所の南側の東西の道を輿道というのは、輿が川まで行くとき通るからで、付近を輿巻というのは、輿が荒れ廻るので、明治初年に字名をつけたとき、つけられたものである。

祭ばやしは皆原・大門・鈴長と三基あるが何れも明治三十年からはやしを始めたものであって、屋台（山車）も同時に出来た。戦前には三台の屋台を神社の庭に据えて賑やかに祭りをしたが、戦後は大門と皆原からは持って来なくなり、鈴長の一台だけ神社の庭に引き出すようになった。

鈴鹿明神の祭りは、田植え上りの農閑の一と休みの時季なので、見物人が群集したが、現在では農業規模が小さいので、農間の休日などなくなってしまい、市全体も農村のおもかげは薄らいで半都市化した。

明神の祭日を昔から八月一日として変更しない訳は、氏子の役員すらも知らないで、毎年同じことを繰返しているが、祭日を変更しないのは、暦を見ると成る程と合点出来る。八月一日は八朔といって、農家では田植えを終えて休養した。その日は神に稲の豊作を祈願する祭りの日であった。この日に明神の祭りを行ったのである。輿の鳳凰の嘴に稲の若穂をくわえさせるのは、抜穂（ぬいほ）といって、神に稲の若穂を供える神饌なのである。

この習俗は何十年続けられているのか不明だが、古老の話によると明治年間から続いているという。稲の穂を寄進する人達は習慣と

して考えているかも知れないが、この神事は永く続けたいものである。

輿を用排水路まで持って行き水中の小石を輿に入れて戻る行事があるが、古い時代には相模川まで行ってみそぎの儀式を行った名残りであろう。水と川との関連したきよめの行事は土産神（うぶすな）の祭祀行事の名残りである。

今の神社は交通安全のお守りなどを出して時勢に便乗したつもりで居るが、それより昔から続けている神事の原則を理解して、古い習俗を守り続けたい。

鈴鹿明神の神事には、伊勢神宮の神事と同じ神事が、様式は違うが永い間行われている

先に述べた「抜穂」の神事は豊受大神宮が七月十六日に行う神事で、神田の若穂を「みけ」として神前に供え、稲の豊作を祈願する儀式である。新嘗祭は新米を神前に供えて、稲の稔りを神に奉謝する儀式で、伊勢神宮で行う。鈴鹿明神では十月半ばに新嘗祭の儀式を行うのである。

出開帳

飯島忠雄

江戸時代中期から末期にかけて、関東中の寺が江戸の浅草に出開帳をやった。出開帳とは寺が本尊を浅草に持って行き、どこかの寺の庭を借りて仮堂を建てて本尊を公開（開帳）したことで、目的は参詣客のお賽銭であった唯開帳しても収入がないので、浅草寺の境内で年中興行している興行師に芸人を頼んでもらい、小屋掛けをして芸を客に見せ、人寄せをした。開帳期間は二十日から一ケ月くらいであったらしい。

此の開帳には相当の経費がかかったろうと思われる。境内を借りる地代や芸人への支払役員の滞在費等で、一ケ月もかかって開帳してどのくらい上げ銭があったか結果は不明だが、開帳をやる寺寺は財力に乏しいために、苦肉の策として出開帳を決行したものであろ

う。

武江年表中におびたゞしい数の寺が江戸へ出開帳している。座間では円教寺が文久年間に、宗仲寺が安政年間、星谷寺が寛政年間に出開帳をしている。

出開帳終了後の損益計算の記録は無いが、出開帳中参詣者から寄進を受けた什物が残っている。円教寺の「きんす」に文久二年銘で百名近い寄進者の名が刻んである。吉原の女郎屋の主人、かご屋、商人、あらゆる階層の人達の零細な金を寄せて、一個のきんすを寄進したのである。星谷寺の観音堂の「たぞや灯籠」一対は尾州侯屋敷の奥女中初瀬という者が寄進した物である。初瀬は実在人物であろうが知るべき手がかりはない。この灯籠は代金で寄進したものを、星谷寺で地元の石工に造らせて立てたものであろう。

大山の阿夫利神社の長い参道の両側に立っている江戸期の火消や鳶職の標石は、大山石尊が江戸に出開帳した時寄進を受けたもので出開帳の時だけの信仰で永続した信仰者ではなかろう。

この時代の寺の財政は苦しく、手の打ちようもない貧乏百姓の少い檀徒で挽回の法もなく、考え付いたのが出開帳で、乗るか反るかの一六勝負は運に任せてやったものであろう。江戸や京都、大阪は当時から日本の大都市で、転ぶも起るも運次第と、都会へ集った群衆は皆思い思いに幸運を握ろうと喘いで居た。地方の若者が一旗上げようと江戸に集るのと同様に、出開帳も江戸ッ子の信仰を集めるか見放されるかの運試しであった。

現代では寺の総代をやっていても、造ろうと思えば大して苦労しなくても、でっかい梵鐘が出来る、いい世の中になった。今の檀家や氏子が簡単に寄進をするのは、神仏の信仰が厚くなったからだと坊主は云うが、そうじゃない。檀家が金を持っているから寄付するので、信仰などと余り関係なさそうだ。如何に信仰が篤くともねえ袖は振れねえのである

それにつけても昔の出開帳には世話人は計り知れない苦労をしたものであろう。

星谷寺の七不思議

角田俊久

座間の名刹星谷寺（古義真言宗）には、昔より幾多の伝説が伝えられている。日本人は三とか五とかの端数を喜ぶ習慣から、この寺のいろいろな語り草を、七不思議として現在次のものを挙げている。

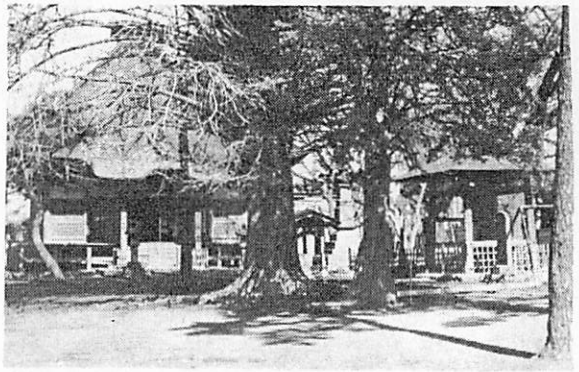
(一)撞座が一つの梵鐘

梵鐘の撞座は元来二箇（まれには三箇、四箇のもあるという）であるが、観音堂境内にある梵鐘の撞座は一箇であることから、日本の三奇鐘の一つとして、江戸時代より有名になったという。

梵鐘の銘に嘉祿三年（一二二七）としてあり、全国の現存梵鐘中では五〇番目、関東以北では二番目に古いものとされている。平安時代の優雅な面影の中にも、鎌倉期の特長を備え、金工史上からも重要視され、昭和四十三年六月十五日付で国の重要文化財に指定されている。

(二)咲き分け散り椿

梵鐘の北側にある。一本の椿の木より五通りの花（純白、紅に白の斑点、淡紅、濃紅白色に紅の斑点）が咲くので、咲き分け椿と



星の谷観音堂

して親しまれている。又落花する時椿の花弁は一かたまりとなって散るのが、普通であるのに、この椿の花は一枚づつ散るので、散り椿と呼ばれている。

(三)観音草（別名田村草）

寺伝の版木には坂上田村麻呂が、東北遠征の折、この寺に立寄り境内にあるこの薬草により、奇病をいやしたと記されている。

今日では専ら、中風の妙薬として、この枝葉を煎じ薬として服用のため、遠方からも来る人があるということである。

(四)もみじの老木

もみじの老木で、幹の一部が変形し乳状となり、あたかも太い気根を垂れているように見える。

今は木が枯れたので、原形のまま、堂内に納められている。

(五)星の井

昼間星が映るというので、こう呼ばれている。星の谷の地名も何かこれと関係がありそうだ。

井戸側は自然石を円形にくり抜き「星の井」と陽刻されている。明治初年の奉納である。

(六)くすの木の化石

旧境内にあった池中より発見されたものという。

くすの木の化石であることは確からしいがゆすると水音がするのには誰も驚く。

(七)不断桜

星谷寺西方の墓地入口にある桜の老木で、開花期には勿論、年中どの枝かに花をつけているということから、こう呼ばれている。モチの木と共生しているので、やどり木としても珍らしがられている。

(八)鎌倉郡座間郷と刻んである宝篋印塔

観音堂の前にある大きな宝篋印塔に「鎌倉郡座間郷」と刻んである。座間郷は高座郡の真中にあるのに、不思議である、というので前記の七つのうちの一つを除き、これを七不思議に数える人もある。この不思議は学問的に意味があるが、その理由は未詳である。

桜田物語

角田俊久

座間入谷の低地で現在桜田と呼ばれている所がある。昔よりこの地一帯はフケ田と言い、下方からの湧き水のため稲は冷え、耕土は深過ぎて農耕作業は殆んど出来ない状態であった。為に徒らにあしやよしの茂るにまかされていた。

話は何時のことか年代ははっきりしないが渋谷庄司重国の子孫に渋谷高間という人がいた。深く仏教に帰依して諸国を巡り、遂に薙髪して甲州上野原報国寺の徒弟となったという。

高間の妻女某は一女小桜を残し、哀れにも黄泉の国に旅立った。愛妻を失った高間は、寂しい日々を送り.迎えていたが、愛児小桜に慰められいた。

しかし時日が経つにつれ、母のいない小桜の言動をみている中に、小桜可愛さがこみあげて来た。小桜は「お父さん。どうしてもお母さんが無くっては、早く母さんを見つけて来て。だんだんつまらなくなってしまう。」と云い云い堪えきれないように、泣きはらした。双眼を涙で曇らせては、高間に固く抱き付いて泣いたのであった。

夕陽が山に落ちかゝる頃、高間は一人で静かに考えてみた。静かに眼をつむって—。

——でも俺にはあの小桜がある。後妻をもとめた結果が、どんな波紋を描くだろう—。若し後妻を入れた結果が、現在の俺以上に苦しみに苦しむかは知れきった事実だ。

高間は思いながらも遂に後妻松女を入れたやがて松女との間には一子小柳が出来大きくなっていった。

この二人小桜と小柳は実に人目も羨ましい程のむつまじさであった。二人は何時も平和な一日々々を送った。

「小桜さん何時迄も仲よくしましょう。母さんの下に」と、こんなことをよく小柳は口

にした。でも小桜の心は其の言葉が、なぜか悩ましかった。殊に「母さん。」と耳にする時の小桜の胸は云い知れない、あの暗い闇を思わせた。小柳がもしも居なかったら一日も生活に堪えられなかったかも知れない。彼女には心に一人描いて微笑んだ父さんしかなかった時の母と、実在の母との懸隔が余りにも大きかった。「やっぱりなかった時の方が幸福だった。母さんのいなかった二人きりだった方が ― 」と思うようになった。

相模野に十三夜の月光がきらめく時、小桜は一人砂丘に立っていた。そうして過去の幸福を夢みていた。小柳とは相変らず仲よく幸福の夢には浸っていた。

かくて幾年かは過ぎて行った。やがて高間は仏教修業のため旅立つことになった。残された小桜の境遇が、それから変っていったのも当然である。とうとう最後のものがやって来た。

松女は実子小柳を後嗣にするため、小桜を哀れ犠牲にした。桜田の深渕に投じたのである。これによって一時松女の心も平和にかえったかの如く見えた。が小柳は

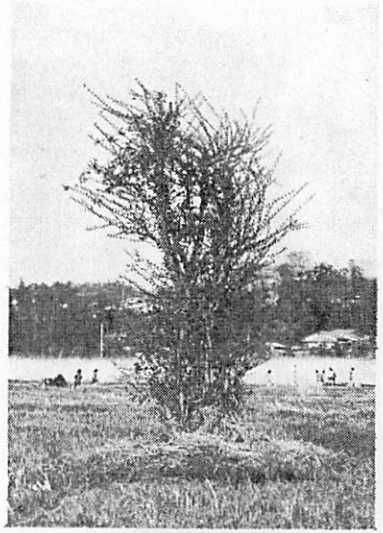
― 世の中に誰よりも好きなあの小桜さん、あの人がいないのに何時迄生長らえていても ― 。こう叫んで小柳は、小桜と同じ深渕に自らの身を投じたのである。

日ならずしてこの事件が発覚し、松女は刑せられた。一方里人は小桜をあわれみ、小桜を植え碑を建ててねんごろに小桜の霊を弔ったと伝えている。

さて、諸国修業を了えた高間は、帰国後事の次第を知り、悲しみの中にも竜源院を起し一門の霊を弔ったということである。

小桜の墓というのは今の国鉄線入谷駅の南東端に近い田圃の中にあった約五坪ほどの草地で、桜の木が一本生えていた。飯島忠雄氏によれば、貞治二年（一三四六）と康正四年（一四五八）の板碑があったというが、それらはみな、耕地整理のために失われてしまった。小柳の墓の跡も、座間高校の北西端に近い田の畦道に、ただ一本小さなイボタノキが

残っているばかりである。



小柳姫の墓の跡

座間動物誌 I

心岩寺の「狐」と「狸」

白井光信

序

私は「キツネサン」や「タヌキサン」と一所に育ったと言うたらオーバーかな、いやオーバーじゃァ無いと断言する。

明治の末葉に入谷の心岩寺と言う禅寺の倅（せがれ）として生まれた。寺の境内は広かった。山あり谷あり、滾々（コンコン）と涌く泉あり、山葵田（わさびだ）あり、樫や檜の密林あり、松ばやしあり、竹林あり、崖（がけ）あり、池あり、水田あり、畑あり、江戸時代の大名門（山門）が唯一の出入箇所で、周囲は全部厚い竹垣でめぐらし隣近所もへだたりあり、極端に閑静幽雅な環境であった。だからこそキツネサンやタヌキサンが住居し、今でも古老は「心岩寺の狐」「心岩寺の狸」と愛称している。特別に保護して居たわけでもないが周囲が次第に開けるに従い安住の地をこの寺に求めて来たものと思はれる。時々鉄砲打（ぶ）ちが密入すると「鉄砲持ってはいってはいけない。禁猟区だ」とキメつけて居た。

かくして生まれながらキツネサンやタヌキサンとのおつきあいが始まって居たのである

以下体験記を書き座間動物誌の序篇とする

第一話　きつね

本堂と庫裡との後ろは中庭を隔てて高い崖がある。上には樫や檜や桜の大木が茂り、中段の根本にキツネさんの穴すなわち住家が深く縦横に掘られて居る。外界とは全く遮断され、絶対に他人には見られない、キツネサンと私達家族との「秘密の場」なのである。

穴を背景に、中庭で親子五、六匹が常に遊んで居た。いつ見ても親狐は警戒的でキョトンとこちらを見て居る。眼は炯々と輝き、茶褐色の毛を風に靡かせ体長の半分はあるであろう総状中太りの尾を引き威風堂々たるものである。子狐は親狐の脚下でジャレていた。丁度犬の子が寝ころがり上向きになって親犬の胸毛のあたりにたわむれるが如く、むさぐる如く。

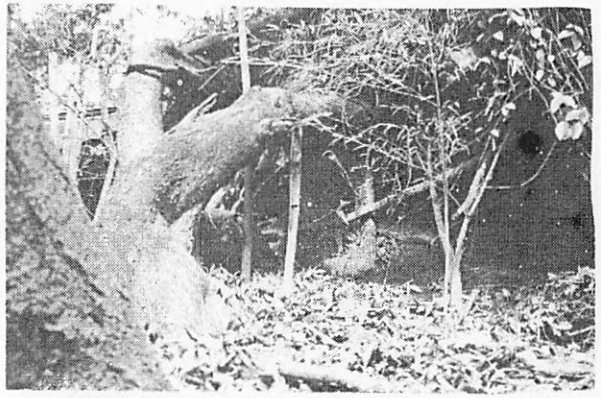
常食は肉だが、お寺にそんなものはある筈は無く、うどんやお菓子、それに、おにぎり等やって居た。うどんは大好物だった。軒下迄来て、子狐の頭などなでてやったが、どんなになれても「つかまえる」ことはしなかった。

何事も無いのに急遽穴にかけ込む。変だなと思って居るとやがて山門の方から跫音がする。来客なのである。実に敏感だ。千里の先を知ると言う可く自然の法則を身を以て知りつくして居る。この場面には再々出遭った。彼が突如逃げる時は、来客ありの予告であることを子供心に悟った。

秋から冬にかけてカサコソ落葉を踏む音がする。よく見れば直経百米位いの楕円形の道が崖の上から下に、ふみかためられて自然の路になって居る。

人道ぢゃない。キツネサンのトレーニング道場なのである。必ず先頭は親狐、次に子狐が嬉々と従い歩くのである、走るのである。これは他日外界に出て独立する時の生活訓練なのである。この途中に於て襲撃の仕方や孤独に耐えることを体験させられるのである。

これを二回も三回もまわり、然かも私の目の前で平然とやってのけるのである。私達家族に対するこの信頼感はいたく私達に好感と保護を決心させた。本当に嬉しくて涙がにじ



狐の住処（すみか）
中央の黒いところに穴を幾つも堀っておいた

み出た。だがこの場面は他人には絶対に見てもらうことができず、また見せられないことであって、「話」として語り継ぐだけである

第二話

○お早うございます。

○こりょう、お宅のお稲荷さんに上げておくんなせえ

△どうもすみませんねぇ、ご馳走様です。

○こりょうやりはじめてからっちゅうもんはうちんとこのニハットリャァ、決してとんねえんでさァ、だからめえとし（毎年）おあげするんでよろしくおねげえします。

△どちらさんでも、そうおっしゃいます。せんだっても国分の方（かた）がお持ちになりました。アラタカなもんですねえ。これからが僕の得意の出番となる。そのお赤飯やアブラゲ（油揚げ）を持ってキツネさんの穴の前にとどける。

あるある。ニワトリの白い羽根、焦げ茶色の羽根、小骨の古いのやら新しいのが一面に散らばってる。時には獲りたてがかくされてた。

「隣の庄さんちからとどいたんだよ。あすこなァ獲っちゃァ　いけねえよ。」といいきかせて祈りを込めて置いて来る。特に初午の日は多かった。海老名の国分方面からも中山さんだの小山さんだのをはじめとして多かっ

た。あんなに遠い所まで夜中に行って失敬して来るらしい。そして、この御供物が覿面（てきめん）にきくらしい。狐の夜行性を如実に物語っている。そしてかかる家の被害報告はきかない。反面に被害者はみな御供物をささげない家の人ばかりだった。そしてこれ等の人も亦急いでささげたのである。そして、重箱にお赤飯をいっぱいつめてアブラゲ二、三枚が定量だった。そして「心岩寺の狐」の仕業と疑いなく決められていた。ボクンチのは一度もとらなかった。

第三話

秋から冬にかけての落葉を踏むカサコソの音は私の心をたのしませてくれた。我れこれをこよなく愛すだ。だが一方では又一番嫌いな時季でもあった。寒いからではない。我が家の愛狐受難の時節だからである。

「ババン」と夜のしじまを破ってデッカイ爆裂音が響く。「それ爆裂弾だ」と云って隣り近所の人がワイワイ集まって来る。即ち狐を拾いにだ。

毎年この時節になると一度や二度この事件が起こる。と云うのは何者かが爆弾仕掛の餌をかけて狐を爆死させて捕る一方法なのである。

或夜などは隣り近所をはじめ、星の谷、皆原など合せて七軒もの飼犬が受難死した。

それは「あさしがた」のことだった。七匹もの犬が前隣りの辰ッさんの物置の前に横たえられた。

○こりゃあ、○○ちゃんとこの「デカ」だ。
○ありぁア、○○さんちの「クロ」だ。
○そりゃア、でえもん（大門）の○○ちゃん

とこの「エス」ぢゃアねえか

等々わいわい大騒ぎ。いずれも口が爆裂して死んで居る。大きいの、小さいの、中にはまだフウフウ死に切れないで唸ってるのも居る。それはそうだ。心臓はしっかりして居るんだから口だけの爆裂では一挙にゃ死ねない実に悽惨な場面だ。「とても助からねえ。早く安楽死させてやるこたァ出来ねェもんか」などの説も出る。「ひでえことをしゃァがる

いつかひっつかめえてとっちめなきゃァ」と異口同音に憤慨する。

誰が仕掛けたのかもわからない。なんでも「かァむこう（川向う）の人だんべえ」との推量だった。そして狐がやられたことも聞かない。彼等は仕掛けた所を知ってるから、爆裂と共に飛出していち早く持ち逃げするらしかった。「だけんどおいらの飛び出しがはえェから拾って逃げる隙もなかんべぇ」との定説だった。大抵は村の飼犬が被害者で飛んでもない犠牲だった。

お巡りさんに届けたんだろうか？　他郷勤務の定年近いお巡りさんに話したら、自分位いになったらトテも逮捕なんてむずかしい。只、ガッチャンガッチャン、サーベル（洋刀）を鳴らして忙しそうに追っ払うだけが精一杯だと語った。

この話は鈴鹿の遠藤儀平、鈴木八重吉、斉藤彦太郎、石井関次郎さんなどがくわしく知って居る。

晩秋初冬になると「さつまぐら」の「くずかき」が始まる。或る日この作業を家族総出でやって居たら、父がその爆裂弾を発見した

それは爆弾をスルメで包んだ一と口に食べられる位いの飴玉大のものだった。樫の大木の切株の上にチョコンと置いてあった。父はスルメを解体したがあとはどうしたか知らない。丁度独逸のツェピリン飛行船が飛来した頃のことだった。

第四話

毎晩の様に前隣りの「庄」さんとこえ、夕飯が済むと「ゆうへえり」に行った。お風呂に入れてもらうのである。ひさしの下の片隅に据えられた風呂であった。大抵「一とくべしべえよ」と云って「くわで」（桑の枝）をたいて下さった。「おナカ」さんだった。

夏など湯上りしてから裸でフルマラで街道へ出て涼んだものだ。よくぞ男に生まれけるをしみじみ味わったのもこの時である。「仕めえ風呂」なんで夜も遅く通行人なんかほとんどなかった。

その時だ。前の田圃を越えて下河原（しも

がわら）の四ッ谷寄り勘三堰（かんざぶせぎ）のあたりを沢山の火がそれはそれはたくさんチラチラ右往左往するのである。これを里人は「狐の提燈」（キツネノチョウチン）と呼んでいた。有名なものだ。

中学一、二年頃だったか、一夜自転車に乗って竹刀（しない）片手にその現場に突込んだ。だが誰も居ない。何の変哲も認められない。さっきまであんなにチラチラ賑わって居たのに。この探険を二晩三晩やって見たが唯川水が黙々と南流しているだけだった。帰って元の位置に立って見ても「狐の提燈」は見られない。うーんと間がたつと又、其の現象が起きる。

世間では云う。狐が骨をくわえて走るんだと。まことしやかに語り継がれている。其の火なら青いあの螢光燈の光であるべきだが、さに非ず。淡紅色の焔がメロメロチラチラ点滅し、そして相当長い距離に渉り行きつもどりつするのである。

こは何者の仕業ぞ。遠方の電灯や走る電車の光を見て居るとチラチラ点滅して見えるが近寄るとチラチラも安定して点滅もしない。これは空気に粗密濃淡があることによる現象であろう。

「狐の提燈」はこれとは全く異質のものなのである。見れば見るほど不可解だ。研究心がウンと盛り上がって来るんだが、今では全然見られない。そして科学的説明を聞いたことも読んだこともない。永遠の謎なのだろうか。

第五話

大正のはじめから六、七、八年頃には村の青年達は、一里も二里も遠方へ夜遊びに行くのが何よりの楽しみだった。所謂「夜ばい」かな。村娘の風呂を覗き見するのなどが主なる目的だったらしい。磯部、下溝、番田、果ては遠く上溝あたり迄遠征した者もあると斉藤酒造丸（みきまる）さんに聞いたことがある。

ゆんべ（昨夜）帰途、ひとっとこを堂々巡りして果ては化かされたかと気付き、煙管（

キセル）逆手に怪物出たらんにはと身構えたそれにしても「マア一と休み」と一服したらもう東の空が白らんで来て無事帰還したとは鈴木八重吉さんの述懐である。これに類した話は全国的に多い。

其所で思うんだが狐が化かすなんて事が果してあるんだろうか？　いづれも錯覚や幻覚に起因する心の迷いの現象であろう。としてかかる時、とにかくも我れにあす（明日）あり「先ず一服」とくるのが事件解決の「鍵」であることは右の体験が如実に物語っている

狐さんはどの話もいぢ悪者に仕立てられている。然かも定まって雌狐である。ベタベタ塗り立てた娘さんを「キツネが化けた様だ」と評するが、まさに男性の女性に対する警告と見る。それにしても「狸」の代表は「雄」がすることになっているのはこれまた不思議でならない。

白雨を「狐の嫁入り」と歌う。角（つの）かくしに愛くるしい顔、美くしい禍福（うちかけ）を着たいとほしい姿、多くの供人にかしづかれて、しずしずと進む行列絵巻にホノボノとした明るさを見るのは、少年時代に仲良く遊んだ野生の「キツネサン」のイメージが潜んでるからだろうか。

昭和のはじめ頃まで、ボクンチに住居して居てくれた「キツネさんー・」どこに居ても元気でネ。

心岩寺の森

たぬき

第一話

前記「松林あり」の松林には一と抱え位いのが沢山あった。相模川の第一段丘の斜面で、此処がタヌちゃんの住居である。親狸夫婦と五、六匹の子狸が居る。穴の入口は四方にあり内部は相連絡して非常に備えてある。

初夏の頃五、六匹の子を産む。ヨチヨチ頻繁に出入りする。穴の上部に身を潜めて出て来た所を女笊（めざる）でふさぎ生捕る。簡単なものだ。これは私の創案した捕獲法で恐らく日本一だと自負して今こそ公表する。

毎年二匹だけつかまえて鶏の雛箱に入れて置くのだが親狸はグルグル廻って早く出て来い早く出て来いとクンクン誘う。二晩三晩位いで開放してやる。にもかかわらず再度つかまるのだからボクンチの狸さんはお人よしだった。よっぽどの。

其の頃はどこの家でも一年中夕食には定まって「うどん」を打つ。娘達はこれが上手に打てて、始めて嫁入りの資格が得られる。米をかばう政策でもあった。其の証拠には米より麦の消費が多かった家はザラだった。

夏の夜は明けっ放なしで夕食だ。そこえタヌちゃんがやって来る。「おう来たかい」と云って母がうどんを持って行くと前脚を椽側に掛けてもっともっととねだる。必然的にこの仕事は私の専任となった。毎晩毎晩だ。お友達と云うよりも全く家族と成りきってのほほ笑ましい姿だった。

これは現代流に云うと「餌付け」だ。いやな言葉だ。観光資源と云う我利我利観念がうづいているからだ。ボクンチのこれは唯自然と仲良くおたがいに、いとしみ愛する、何とも早純情の自然的発露だったのである。

悪る者がやって来た。鉄砲打（ぶ）ちだ。父は不在だった。母の断然不許可を押し切って彼は「いぶり出し」戦法をはじめた。ボクはジッと見て居た。あちこちの穴からわずかに煙りが上ったと思っている。だが我がタヌちゃんは出なかった。安堵の胸を撫ぜおろしたのだった。

第二話

関東大震災後のある冬、山葵田（わさびだ）の水源に一匹の親狸が斃れて居た。傷は無い毒物を食べさせられて苦しまぎれに水を求めて来たのだった。可哀想に。父は業者に売った。代価五円也。折しも震災で倒壊した法塔（はっとう）の修復作業がはじまって居た鎌倉の建長寺に寄附したのだった。石に刻してある。

これと相前後して自転車屋のおぢさん（一杉直之）が山門の所の厚い竹垣に首を突っ込んで動けなくなった狸をつかまえた。素早い一杉さんだって素手で生け捕るなんて出来るもんぢゃない。矢っ張り毒を食わされて居たらしい。

「狸」受難史の一とこまである。

第三話

昭和三十八、九年頃だった。役場の佐賀厚生課長から座間公園の狸をもらってくれないかの相談を受けた。引取った。しかもガッチりした小舎まで持って来た。部屋の片隅にとぢこもってるトボケ顔だけがのぞけた。そして毛の抜ける皮膚病にかかって居た。

獣医にも診てもらったが自然療法でなおって来た。一年半もかかったかな。それにしても狸はものすごい不精者だ。これには閉口頓首した。

夏の終り頃だった。家族会議の結果彼の生れ故郷であろう丹沢山に返すこと、にがすことにした。

私はボール箱に入れて自転車に乗せて厚木の上飯山と清川村の境の一寸した峠の所まで運び、持参した腸詰やお菓子やバナナ等の御馳走をひろげて最后の別離の宴を張った。彼はチーズを少し食べただけで叢の中に嬉嬉として消えて行った。一度も振り向いてくれなかった。

この帰途峠のだらだら坂で河原宿の市川勝氏夫妻の自動車と出合った。

「どうしてこんな所へ？」と夫妻は目を見張った。恰服のいい夫妻の顔が印象的だった

「一寸用があって」と悲しみをゴマ化した丁度一週間たって朝日新聞の朝刊は写真入りで「狸、生捕る」と報じた。村人が犬に追われて進退極った狸を生捕ったが、処置に困って厚木の地方事務所にとどけたと云うもの鳩首協議の結果猟季でも無し矢張り生れ故郷の丹沢山に返してやったとの記事だった。

私は別れてからこの処憂鬱だった。前後の判断からこの事件の真犯人はまさしく私だったのである。そしてこんな情ある村人の又お役所の処置に感謝感激すると共に欣喜雀躍、憂鬱を吹っ飛ばしちゃった。

私は信ずる。今でもこのタヌちゃんが丹沢山で元気に生きていると。

第四話

狸は化かすと云う。飛んでも無い。料亭など軒なみに大きいのを据えて置くでしょう。ボクンチでも益子焼のデカイのをやって置くトボケた姿から其の真意を確かめよう。

笠は彼の後援者又は指導者を意味する。目はマンマルで物事を正しく見極める。

顔はトボケだが世の中を愛想よく渡る。徳利の㊅は腹八分で長命を物語る。

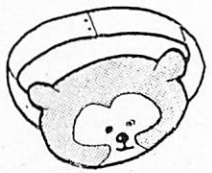
通（かよい）はすべて通（かよ）いで通用する程の信用がある。

腹は大きく気力充実。

睾丸は狸のキンタマ八畳敷。度量大にして清濁あわせ飲むの意、引いてはこれ こそ金（きん）の玉である。

尾は末広のすえひろがり。

右条々いづれも、目出たし、芽出たし。めでたし。



第二部（資料篇）

夷参と座間

――市名の由来――

鈴木芳夫

一　原始時代

座間市内には、二、三万年も前から人間が往来していた形跡もあるし、数千年前の部落の跡も、台地と相模川低地との境の崖の上下や、目久尻川の谷の両側の台地の上に、数多く見出される。それらの遺跡の上に建ったり庭先きの地下から土器が出てくるような家も多い。しかし、その頃、座間市域は何と呼ばれていたかは知る術がない。

二　東海道の「夷参駅」―奈良時代―

（「夷参」の読み方は後にのべるが、差し当り「イサン」と音読しておく）

座間の地は、奈良時代には、東海道の「夷参駅」があったと伝えられている。続日本紀（七九一年にできた国史）の宝亀二年（七七一）の条に、「今、東海道は相模国夷参駅より下総国に達す、其の間四駅……」とあるがそのうちの「夷参駅」が座間である、と云うのである。他に文献的資料がなく、これだけでは証拠にならない。そこで少し吟味をしてみよう。

だいたい、初期の東海道の官道は、足柄峠を越え、酒匂川の平野に出て、国府津から海岸沿いに大磯を通り、寒川あたりで相模川を渡り、鎌倉から三浦半島の先きに抜け、浦賀水道を渡って、上総国へ達していた。それが奈良時代に入ると、相模平野を斜に越え、川崎市中部から今の都心部を縦断、浅草あたりから、下総国府のあった今の市川市国府台に通じるようになった。武蔵国は東山道に属していたので、武蔵国府であった今の府中市は東海道の官道は通過していなかった。そこで「それでは不便である」と、武蔵国を東海道に所管替えをし、東海道は相模国府から武蔵国府を通過、下総国府に達するようにしようと上奏した。その文の一部が、前記引用の文である。

他に記事もないし、これだけでは、夷参駅が相模国最北東部であろうことは想像できても、「座間だ」とは簡単に決められない。そこで時代を進んでみる。

三　伊参郷―平安時代―

（「伊参」も「イサン」と音読しておく）

平安時代中期（九三五年ごろ）出来た「和名抄」と略称されている一種の百科辞典の中に、全国の郷名が載っている。その中の相模国高座郡の項には、「美濃　伊参　有鹿　深見　高座　渭堤　寒川　塩田　二宝　岡本　土甘　河会　大庭」とある。高座郡はほゞ今の相模原市から茅ヶ崎、藤沢市までを含んでいたが、この郷名の順序は、現在判明している地名から判断して、だいたい北方から順に書かれている。

そこで「伊参」は、有鹿（海老名市河原口に、その頃から有鹿神社があった）と深見（大和市）とを結ぶ線の北側で、その北方に更に一郷（美濃）が存在し得る土地、ということになる。そうなると「伊参」と座間の地とは重ってくるし、「夷参」の位置とも矛盾しない。また「夷参」と「伊参」も同じに読み得る。従い、座間の地は、奈良時代の「夷参駅」の地である、と云い得るわけである。

四　考古学的にみて

前記の結論は考古学的にみても誤りないと思われる。というのは、ほぼ奈良時代の頃造られたとみられる横穴（古墳）が、台地の西縁の崖面の、市役所のある鈴鹿から根下方面にかけて二十基以上、羽根沢の谷間に六基、目久尻川の谷の崖面に九基、発見されている。この数は、この地に、五十戸を標準とした一郷にふさわしい集落のあったことを物語っている。また、電報電話局付近には、奈良時代以前からの集落の跡も埋れている。

以上のようにして、座間の地は、平安時代には伊参郷であり、奈良時代には「夷参駅」の地であった、と断定できる訳けである。

もっとも、伊参郷は、今の座間市域ばかりではなく、相模原市磯部と新戸を含んでいたと考えられる。磯部、新戸の二ヶ村は、江戸

時代以前にも「座間郷七ヶ村」のうちに数えられ、江戸時代にも、特に密接に組合っていたが、これについては後に述べる。

五　夷参駅の運命

東海道は、府中を経由するようになると、今の伊勢原市から厚木市荻野、相模原市塩田を通過するようになってしまい、夷参駅はさびれてしまったが、海老名市国分にあった国分寺の七重の塔が聳えていた頃は、往来の人々で賑かであったろう。前記横穴の発掘の結果から云えば、金色のイヤリングやガラス玉のネックレスをした娘さんもいたのである。ただ、夷参駅の人家のあった跡は、まだ見つかっていない。

六　夷参と伊参の読み方と意味

まず「伊参」から始めてみると、群馬県中条町には、前記和名抄に出てくる郷名で、今でも「伊参」と書き、「イサマ」と読まれている地名がある。埼玉県吉田町には、「イサマ」と読んで「石間」と書く地名がある。座間付近では現在「イシマ」というと、石ころの多い河原のような土地を意味し、八王子付近も同様である。

石＝イシは、「イソ」とか「イサ」とか発音されることが多い。とすれば「イシマ」も「イサマ」も同じ意味で、「イシマ＝石間＝イサマ＝伊参」と考えられ、座間の「伊参」も、「イサマ」と読まれたと推定される。恐らく相模川の氾濫後の石ころの多い土地を意味していると思われる。

土地の状況を調べてみると、現在でも、国鉄相模線以西は、田圃中でも「河原」と云う小字名が多く、「河原宿」と云う部落もある。

これは四百五十年くらい前まで相模川が流れていた名残りである。

同様に、奈良時代「イサマ（石間）」という集落があったとすれば、それから何年か前は、そこは「イサマ＝石間」、即ち石ころの多い河原の跡だったと考えられる。イサマ部落は、そんな土地を開拓してできた村だったわけである。

七　再び考古学的にみて

六にのべたことをまた考古学的に調べてみると、他の土地では奈良時代以前に多く作られた、土を盛り上げた高塚式古墳が、座間では見当っていない。逆に相模川対岸の厚木市依知地域には多い。

これは、古墳時代には相模川は今よりはるか東の方を流れ、その東側には余り水田を開く余地がなく、従って、余り大きな部落も出来ず、塚を築いて墓を作るほど有力な者もいなかったと考えられる。依知側に高塚式古墳の多いのは、相模川西岸に水田が広く開け、有力者が多かったからで、間接的に、その東岸に水田が少なかったことを物語るものであろう。

海老名市上今泉にある秋葉山古墳群の、大きな四基の前方後円墳群は、座間以外の広い土地が関係していると考えられるもので、前記した市内発見の横穴（古墳）は、後期のものばかりである。従い、一郷に足る部落であっても、むしろその成立は比較的新しいと考えられる。

以上で、伊参＝夷参は「イサマ」と称え、「石河原」の意味であったことが推定できよう。むしろ「磯部＝イソベ」などの方が遺称に近いであろう。

最後に、「石間」をどうして「夷参」「伊参」と書くかというと、当時既に政府は、地名には感じのよい字を使え、と指令しているので、当て字ではあっても、その指令に従ったまでであろう。

八　座間―室町時代初期―

「伊参」がなぜ「座間」になったかは、明らかでない。「伊達」と書き「イダテ」と読んだのが「ダテ」となったように「イサマ」が「ザマ」になったのだ。伊参を伊佐間と書き、佐間と書くようになり、遂に座間と書くようになった、という説もあるが、その証跡は見当っていない。

ただ「座間郷」と書いた文書は、約六二〇年前（一三五四ごろ）に出現する。

九　異説―坐摩（イガシリ）からか

一説に、座間について、「桓武天皇の皇子葛原親王万民撫育のため東国に下向し、座摩の大祭を教示し給う。故に高座郡といい（皇子の御座所を岩座または高座という）、高座郡の中央につき、摩の一字を間に替え、座間と称す云々」と伝えている。

しかし、高座郡は既に桓武天皇以前にできた日本書紀に出ており、葛原親王の東国下向も史実とはみられていず、更に前記のように平安時代以前から、座間の地は「イサマ」と呼んでいたのだから、この説は怪しいと云える。だが、高座郡と葛原親王のことを除いて誰か都の方から来た身分のある人が名づけたものと解すれば、考えられないこともない。

大阪市に座摩神社、和風に云えばイガスリ（又はイガシリ）の神というのがある。第十五代応神天皇の大隅の宮の土地の守り神とも井戸の神とも伝えられるくらい、古くからの神社である。そして平安時代末まで、皇居には守護神として、「イガスリノカンノコノ神（坐摩神）」が祀られていた。一方、座間郷総鎮守の鈴鹿明神（市役所東側）の祭礼は、明治初年まで「イガスリ祭」と呼ばれていた。これから考えると、座摩神社か「イガスリノカンノコノマツル神」に関係のある者が鈴鹿神社を創始した、とも考えられる。

もっともこれは、必ずしも座摩神社や宮廷に関係づけなくてもよく、座間独自で発生したとも考えられる。

いったい「鈴鹿＝スズカ」とは、清水＝泉の多い土地に名づけられる。事実、鈴鹿明神の付近には泉が多い。これらの泉は、相模川の水が利用し得なかった頃は、座間に取って非常に重要な水源だった。泉は古代は井戸であった。（今でも神井戸＝カメキドと呼ぶ泉が座間高校の傍にある）そこで、井戸の神、土地の守り神、即ち座（坐）摩＝イガスリの神として、何時頃か鎮座の年代を伝えないくらい古く、鈴鹿明神が祀られ（歴史上に出て来てからは、祭神は牛頭天王即ちスサノオノミコトである）、座（坐）摩は、音が同じで

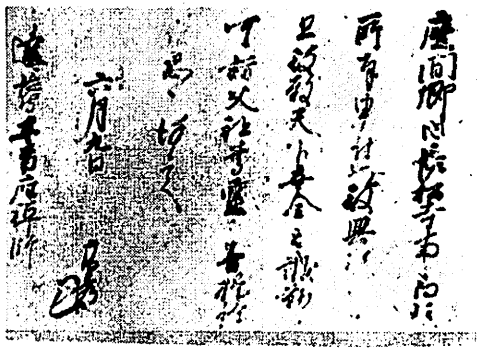
あるため、座間と書かれ「イガスリ」は「ザマ」と音読されるようになり、イガスリの祭は座間（ザマ）の祭となり、何時しかこの「座間」は地名と誤解され、やがて此の地全般の地名として定着するに至ったものではあるまいか。

十　むすび

「座間」が「伊参」から変化したにせよ、「座（坐）摩」から変化したにせよ、「座間」と書いた文書は、前記のように、相当古くから見える。この文書については、また別にのべることにする。

現在発見されている「座間」と書いた最古の文書（写真参照）

〔解読〕座間郷長松寺事向後　承る所を申し付くる也　興□□□され　且つ天下安全の誠勤を致され　父祖の尊霊の菩提を訪い給うべく候　恐々謹言　六月九日　高秀花押　建長寺安首座禅師（元徳三は追記、根処不明、長松寺は相模原市新戸に現存）詳細は略すが、推定で一三五四年頃の文書



「座間」と書いた最古の文書

鎌倉市立図書館蔵

宗仲寺開山源栄上人略伝

飯島忠雄

宗仲寺の開山源栄上人の同寺に関する事蹟と、市の文化財に今はなっている六字名号碑の中の三州大樹寺の住職云々の文字の真相を知るために、鈴木芳夫氏と私とで宗仲寺の住

職平野師の案内により、鎌倉市岩瀬の大長寺を訪れたのは、昭和四十四年二月の雨と霙の降る日であった。

大長寺の若い住職より沢山の記録や古文書類を見せて戴いた。その中から知り得たことは、源栄上人が深い学識と智略とによって、一生の間に各地に寺を建て、宗門の檀徒から信望を集め、老境に入ってからは、徳川氏の遠祖の菩提寺である三河の大樹寺の住職となり、家康の知遇を受けるまでに至ったという上人の生涯の略記が同寺に伝えられていたことである。

それは文政七年（一八二四）に書かれた「大長寺由緒書上書控」に載っていたのであるが、以下漢文体の原文を読みほぐした処を記してみる。

源栄上人は鎌倉在深谷の真言宗福泉寺住職長順の弟子であったという。はじめ法名を順栄といったが、上人の父親の名は不明とのことである。順栄は長順について真言宗の修業をしている内に、時々大長寺の感誉上人の法話を聞くようになった。感誉上人は順栄の智慧が並並ならぬことを見抜いてか、巧妙に智弁を振って浄土宗の真随を説いている間に、真言宗から浄土宗に研鑽の主旨を変えさせ、遂に順栄は師の坊から去って大長寺に入り、存応和尚の弟子になろうとした。存応和尚は長順和尚に順栄の志を打ち明け、順栄をもらい受けて正式に自分の弟子とした。時に順栄十六才の時であった。

数年ならずして、存応和尚は順栄に教えることが無くなったので、自分の師の坊源誉上人に順栄をあづけた。源誉上人が順栄をあづかった三年後の十九才の時に、源誉上人も順栄に教える種がなくなったので、大長寺の大住職観智国師の門弟になった。観智国師は順栄に源栄の法号を与えた。源栄二十一才の元亀元年であった。

観智国師のもとに学ぶこと三年、国師は源栄を三州大樹寺の登誉上人について修業させた。同寺で四年間修業させた後登誉上人は源栄を京都の一心院に行かせ、称念上人の高風

を継がしめた。源栄は更に高野山に赴き真言宗の修業を三年間積み重ねた。そして師のもとを去って十余年、各寺の賢哲の玄妙をことごとく会得して、源栄は国師の膝下に帰った天正十二年申五月国師は増上寺の住職に転任することになったので、国師のすすめにより源栄は大長寺の住職となった。

それから幾年もたたない時に、三州大樹寺の登誉上人は家康公に自分の弟子源栄を偉才の学僧として推挙した。源栄上人が家康に認められたのは登誉上人のおかげであるが、登誉上人は弟子の源栄を自分の跡目に据える心算から、みっちり仕込んで置いたものであろう。

源栄が大長寺の住職になってから六年後の天正十八年春から、秀吉の　小田原城主北条氏一門を相手とした攻防戦が展開するのである。

秀吉の部下の大名は本城を攻める前に連合軍を編成するか又は単独で、関東各地に散在する支城、出城の攻撃をした。北条氏の支城の兵員は一城一万人以下の守備隊であったので案外簡単に落城したが、降伏した城将は少なかった。関東の王者として鳴らした北条軍は強く、一兵残らず斬死したという。中でも北条氏照の八王子城の合戦は大激戦で、皆壮烈な戦死を遂げたと言われている。

天正十八年四月秀吉は家康に北条氏勝の籠る鎌倉玉縄城の攻撃を命じた。家康は僅か七千人余りの守る玉縄城を揉み潰すのは造作もないが、本城からの援兵が来た場合には、攻めるより自分が危ふくなり、場合によれば仏都鎌倉も灰燼になると思い、頼朝ゆかりの大寺院を焼くに忍びなかった。部下と軍議を重ねている間に思い出したのが、祖廟の住職登誉が推挙した源栄が鎌倉に居ることである。重臣の本多忠勝を呼んで、源栄と北条氏勝とを会わせて開城させるように談合させて見たらと話した処、北条家中の豪の者、合戦をせねば引くことはないだろうと思われたが他に妙案もない。やらせてみようというので、源栄上人に交渉をゆだねた。源栄上人は氏勝の

菩提寺の住職とともに氏勝に面会した。かなりの日数を過ぎたが、城主氏勝に無血開城させることに成功した。

戦後家康の助命によって氏勝は死を免除され、家康に対し秀吉は仏都を救った功を賞し北条氏の遺領を与えた。家康は慶長七年に源栄上人に大樹寺の住職を命じて往年の功労を謝した。

源栄上人が鎌倉を兵火から救った功労は、新編相模国風土記稿にちょっぴり記されて居るだけである。大樹寺の住職は十六年間であった。三河で発病したので住職を辞し、相州座間に移り宗仲寺を開山したのが元和四年十一月十日で、悠々自適の中に茶室を設け庭にはかげろう灯籠を立て静かに療養した。寛永十年十一月十日生涯を仏門に捧げた源栄大徳は法臈※六十七年八十二才で入寂した。法名を大長寺四世星蓮社暁誉存阿凝信源栄大和尚という。

明治維新の時薩長二藩の連合軍が徳川氏の居城の江戸城を攻撃することになったのを、西郷隆盛と勝海舟が決死の努力をして中止させ、江戸の市街を無事に保護した美談は誰も知るところであるが、四百年前の太閤小田原攻撃の合戦の最中に、鎌倉を戦火の災から救い安泰ならしめたのは、源栄上人と無名の僧侶とそれに家康の配慮のたまものであった。

註　※法臈とは仏門にある期間を云う

宗仲寺開山記念碑
—六字名号碑—

〔銘文〕向つて右側「（日像）当寺開山星蓮社暁誉存阿凝信源栄大和尚」中央「南無阿弥陀仏」左側「（月像）三刄大樹寺第十九世住干時元和戊午天十一月十日」
（元和戊午天は元和四年＝一六一八）

日本刀学院の創立

飯島忠雄

日支事変もいよいよ長期化した昭和十六年に、東京九段の靖国神社の境内に在った日本刀学院が座間の六反に移転することになった

日本刀鍛錬所の主任は元代議士栗原彦三郎昭秀先生であった。先生は刀剣の愛好家だったが鍛錬に精通され、当時の刀匠達より鍛錬法を習得され、日本刀鍛錬所を靖国神社に建造されて、多くの刀匠の養成につくされた。座間に陸軍士官学校が移転したので、静かな座間で日本刀鍛錬を計画され、靖国神社からの移転が実現したのである。

作業所は平屋木造建二十六坪で、宿舎、付属屋で二十三坪であった。十六年十一月十五日鍮（ふいごう）四台、鍛錬工具四組が据え付けられた。神棚には鍛冶の守護神天一目命が祀られて、表の門柱には日本刀学院の門標が掛られていた。

午後一時から盛大な鍛始の式典が挙行された。古式の鍛冶始で、全国の刀匠が参列した

堀井俊秀　渡辺浪永　勝村正勝　加藤真国
吉原国家　高橋義宗　塚本起正　今野昭宗
秋元昭友　小山信光　小山国光　宮口寿広
卍正次　等の当代の刀匠であった。

鍛冶に携った刀匠は直衣（なおし）小袴に白足袋の装束で、本座は主事の栗原昭秀、一番鎚卍正次、二番鎚堀井俊秀、三番鎚勝村正勝、シテは昭秀の門人が勤めた。鎚音高く打返して、最後の止鍛を頭山満翁が打って一振の短刀を鍛え上げ、来賓刀匠一同国家隆盛を祈って礼拝して式を閉じた。

来賓は今沢政五郎、桂光春、橋本元祐、服部栄治、本阿弥光遜、本阿弥宗景、道明新兵衛、清水澄、平島七万三、明珍宗美、イタリー大使、文部省学芸課長本田弘人、石丸俊三細川護立、遠山満、大隅常信、大久保留次郎

陸軍中将大村斉、陸軍中将渡辺寿、海軍中将渡辺幾次郎、海軍大将竹下勇、武道家中

山博道、陸軍中将中島虎吉、陸軍士官学校副官中尾欽彌少佐、鎧師藤島三郎、羽沢刀剣会長、福島保三郎、工芸家後藤守一、愛刀家末永一三等であった。

日本刀学院の専任刀匠は秋元昭友であった門弟共十人がここに泊り込み鍛刀した。ここに来て若い刀匠を指導した人に今野昭宗、宮入昭平、近藤昭国、若林昭寿の四名があったがみな応召した為、十七年には若林昭寿を残す外若手の新入生三名で鍛刀するようになってしまったが、地金はあっても炭がない、食糧がないというので、思うようには仕事が出来ないで居た。そこへ私が刀剣好きから時々鍛刀作業を見に行く内に、手伝うようになって向打（三番鎚）をやるようになった。手伝っている内に一と通りの鍛刀作業は覚えてしまった。

若林昭寿氏に記念に大小二振打ってくれないかと頼んだら、よろしいというので、出来上っていた軍刀に「於相模国相武台下作之昭和十七年仲秋　為飯島氏昭寿鍛」と銘を切ってくれた。短刀は夜業で鍛えた。長九寸、銘は「合鎚飯島氏昭寿鍛え」と切った。その二刀は戦後失ってしまった。

昭和三十八年に人間国宝に指定された宮入昭平師は、大戦中僅かの間座間に居られたが応召された。不足の食糧は私がととのえ、どうやら三年を持越したが、鍛錬の盛期を得ずに終戦を迎えたのである。刀匠達と私が調達した酒を汲んで三年間の交誼を謝した。

このような縁で、宮入昭平氏と座間市との間は日本刀で結ばれたことから、昭和三十三年十月に、座間六反の日本刀学院で鍛えた軍刀身を、座間町独立十週年記念に寄付して戴いた。その刀は、刃長二尺二寸二分、刃文五ノ目乱関風、鍛小板目、銘は「於相模国宮入昭平作　昭和三十三年十月　祝座間町独立十周年　宮入昭平贈之」である。

人間国宝宮入昭平師と座間町との関係は前記のようだが、宮入さんと深い関係があるのは座間入谷の石井昌国さんである。宮入さんが現代の最高位を国から認められた陰には、

戦時中から石井さんと宮入さんとの間に結ばれた「刀」を通じた縁があったので、石井さんの希望から、座間町（当時）に自作刀を寄贈していただいたものである。その内容は宮入さんの著書「刀匠一代」に詳しく述べられている。

相模野基線座間南端点について

角田俊久

小松原地域の、当時、鈴木墨吉氏の所有地であった座間入谷尖り五、五四三番畑の一角に、一坪余の土地をくぎって、鉄製の囲いがあり、その中に白御影石の標石が置かれている。これは相模野基線南端点を示す大切なもので、現在はこの傍に建設省国土地理院による次のような注意書が建てられている。

〃この標識は、明治十五年（一八八二）に基線測量をおこなったもので、附近は地震予知などに利用されていますので、大切にして下さい〃云々と。

この基線設定については次のようないわれがある。

明治十五年世界に立ち遅れた日本は、当時の陸軍をして、正確な地図を作るため、外国の新智識をとり入れて、相模野に一本の基線を設け、数度にわたり精密な測定をしたという。北端は現在麻溝台にあるが、この南北両端の長さの平均値は、五二〇九・九六九六六七メートルということであった。数度にわたる測定の結果は非常に良かったというが、関東大震災後の測定では、五二一〇・二一二五メートルという数値になっている。つまり大震災で日本列島に異常を来したことになる。

このような測量基線設定の条件には、平らな原野であること、見通しがよくきくこと、空気がすんでいること等々が要求される。当時の相模野はこのような条件を充分満したからである。

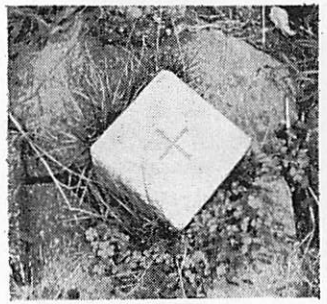
さて、この南北両端の点は二等三角点であったが、測量結果がよいので、翌年には一等三角点にされた。

南端石標の高さは一九センチ、幅は一八センチで、一等三角点と刻まれている。

以前はこの石標の上に、高さ数メートルの櫓が建てられていたが、昭和三年陸軍陸地測量部より、やぐら（三角点覘標）を撤去させる証明書が下附された旨、座間村長より地主宛届いている。恐らくこの年あたりに、やぐらが撤去されたものと思われる。

ところで、この基線を一辺として、西の頂点を高尾山に、東の頂点を高尾山（横浜市）とし、次にこの二点間の距離を測定することにより、東西両頂点の距離が算出される。ついでこの新三角形の頂点を結ぶ一線を底辺として、更に大きな三角形を得るといったように、順次重要な線を求め、地図を作ったわけである。

一日鈴木氏を訪れた際麻溝・座間両端の測手中には、今は亡き芥川吉五郎、芥川松五郎兄弟らの顔が見え、測定には気温測定もしばしば行われたこと等、墨吉氏は昔の思い出をなつかしく語られた。



基線南端点・右はその標石（枠内国有地）立てるは鈴木墨吉氏

明治五年座間宿村議定書

飯島忠雄

明治四年廃藩置県の大綱が成立した。旧い国名を廃して県とし、県には県庁を置き、県令を地方官とした。県令は郡村の形態を旧幕時代のまま統治し、村役人は名主制を廃し、村毎に戸長・副戸長を置き、五人組を廃して五戸毎に　名の伍長を置いて、戸長・副戸長・伍長に村の自治管理一切を果させるように改めた。

翌五年に土地法施行による調査規定を条文にして県下各村々に布告した。村方では県の規定に基づいて、之に協調すべき態勢を固める必要上から、その村独自の議定書を作り、村民共々土地調査の円滑を計った。

座間宿村の議定書は当時の座間宿村副戸長片野要助自筆の記録である。調査の対象となった土地は、山林・田・畑・宅地・共有地・寺院境内・神社境内・小祠の敷地・道路・農道・馬入・私有及び共同の墓地・流作場・荒無地・不定収獲地（等外地）等である。無租地となった土地は道路・農道・馬入・水路・河川・墓地・墓地道等であるが、河川・道路を除いては一筆毎に地番地積を定めて、図面を作成することであった。土地の所有権の認定に紛議が起るのは担保物件と相続関係に伴うもので、其の他土地の境界問題等も考慮の上、役員が或る程度の調整が出来得る職権的な裁定力も議定書の中には含まれていた。以下議定文を検討してみよう。

議定書

一　御布告公用之御趣意堅相守可申事

一　田畑一筆限リ正段取調ニ付畝歩高通不足者其最寄字見面ニ応じ割合致質地高渡之故元地主姓名書上当今調入費之儀如何様相嵩候共元地主高割を以出金可申若入用難渋之者地所流地ニ致持地主姓名も可書上□□請行届然上者当七月晦日限り組頭方へ不残可申上候但御年貢出□残地所進退之儀者従前ニ之通右証文之取極ヲ以相置不実這無之様可仕事

一　右田畑取調書上之後地券御下ケ渡ニ相成候ハヾ古証文年季中ニ分者早速当持主へ地券添書ヲ以相渡年季明請戻之節者地券古証文共元地主江相返可申筈聊違変申間敷事

一　御一新之御趣意ニ基キ戸長壱人副戸長三人ニ相定田畑御年貢者役所取定年分諸役高割等ニハ副戸長三組ニ而□立可申筈一統相談之上取極候上ハ村役人触当日限無相違皆済可申事

但従前六組を三組ニ致候上ハ二組諸張面ヲ一組ニ取纏め年番ニ相勤可申筈之事

一　五人組之義者従前之通伍長ヲ相定村役所触出シ其寄合等差支無之様取計可申且惣寄合之節者触当之刻限通無遅刻集合いたし若不参之者有之候ハヾ伍長之者早速不参人同伴いたし役差支聊致間敷事

右之廉々村役人大小之輩一同立合村議定相極メ候上者五ヶ条之内一ト廉成共相背不実意ヲ申者有之候ハヾ村役人ニ而教諭致萬ケ一我意申候□ニおいては惣高割を以雑用出金御県庁江相届蒙御下知村方一統　静ニ営統仕候様取計可致候及其砌聊違失申間敷候依之村議定書一統調印仕候処如件

明治五壬申年七月

副戸長　片野　梅次郎
吉川政右エ門
若林佐治エ門
小俣甚右エ門
野口　安次郎
鈴木清右エ門

□は判読不能の字

戸　長　稲垣　吾助
副戸長　片野　要助
（副戸長一名不明）

氏名百六十七名印

二番目は一筆毎の縄入れに当って、賃貸或は質入・担保等の証文に書入れた面積と実測した面積の誤差が大きい場合は、実測した面積を書き込み、年貢の料も改める。若しその

増額負担にたえられない者は、負担出来得る範囲の等級に下げること。担保・質地の土地は返済に支障を来さない限り、現所有者の名義で地券を給付する。若し担保・質地が債権者に渡さなければならない場合は、債権者の名義で地券を発行する。負債者が担保を取戻し質地を解消した時には、役人に其の報告をし、正当と認めた場合は質権者の所有名義を取消し、元の所有者名義として地券を渡す。但しこれは調査中の期間である。この貸借問題については、役員の裁定については双方が口入れされては困るから、公正な計らいが出る迄争わぬ事、事件について費用がかゝったら当人が負担すること。土地に関する苦情・悶着は明治五年七月末日までに申出ること。

三番目　一筆調査の事前に土地に関する一切の苦情・悶着を解決して、苦情のあった物件の証文・約束事等の書き物は、再び悶着が起ると面倒になるので、地券を下げ渡す時に証文類は役人立ち合いのもとに地券と証文を取り交させて、事件の再発生を防止しようという案文である。

四・五番目　これまでの名主制を廃止して戸長制度に明治政府は村の機構を替えた。土地の一筆毎の実測・地番、等級をつける土地法の制定は、土地に課税する地租法実施の準備のための規定であった。村の支配者である戸長一名・副戸長一名、外に用水・河川・土木の要務を担当した副戸長、財務の担当者一名を主軸とした四名が村の長（オサ）であった。明治五年の土地調査に於ては、座間宿村では三班に分けて、調査員を一班三名づつ任命して、合計九名がこの事業に当ったのである。この三・四条は調査員の編成を述べたものであり、是に付則を若干付けている。付則内容は異議のある者に対する処置である。村の総会を開くに当り、不参者は伍長が呼び集めること、異議ある者に対しては戸長・副戸長が説得する。これに応ぜぬ者に対しては、一筆調査費の幾分かを総会にかけて罰金として賦課することを提案する。副戸長・伍長等の村役の者でも総会に計って罰金の処置につ

いて諮問し、村民が公正の処置であると判断した場合には、該当者は科料金を村に提出する。という厳しい掟であった。この議定書の裏には江戸時代の「村八分」の仕置の影が存在していた。但し科料金徴収の件については県庁の上司の指示を待って実施すると、萬全の策を備えて善処することを前提しているのであった。

明治以降村役人の名称に「伍長」という役柄は、座間村が座間町になる直前の昭和十年前後まで栗原部落に残っていた。戦時中の隣組長、現代の自治委員等も、役名は替えられたが任務の内容は百年前も現在も大した変化はなさそうに思える。

「座間」という姓

鈴木芳夫

古くは、といっても、大きく人口変動の始まる前の座間村時代には、「座間」という姓は村内にはなく、あったのは、近隣では、厚木市の金田と相模原市の下溝だけだった。

今でも市外へ行くと、親戚同志でも「よお—座間でよ—」などと呼ばれることがある。このように、人はその出身地名で呼ばれることがあり、本人もまたその出身地を「名のり」として使い、しだいに固定化してしまったのが「姓」の一つの起源である。だから、これらの座間姓の者の祖先は、座間出身者だったに違いない。

下溝について調べてみると、下溝村の明治五年の戸籍簿では、二六六戸中八八戸が座間姓である。このように同姓がまとまっているのも珍らしいが、これは相当数の座間出身者が、或る時代に、下溝に移住して行ったことを推測させる。

座間の方を調べてみると、市役所の近くの心岩寺に関する話では、同寺はもと、今の西中学校の東側にあったが、相模川の洪水で流失し、現在地に移ったという。明治初年に書かれた「皇国地誌」の「座間入谷村誌」によ

れば、この洪水は文安年中（一四四四～四九）だったとしている。河原宿、新田宿、四ッ谷などの成立の状況をみると、このことはほぼ肯ける。地下の状況をみても、相模川は今の左岸用水路のあたりまで流れて来て、座間電報電話局のあたりにあった部落も亡びてしまっている。

寺があるくらいだから、そのまわりには相当数の人が住んでいただろう。それらの人の幾分かは座間に残ったであろうが、何分にも水田地帯の大部分は失われてしまったはずなので、やむなく他所へ移った者も多かったであろう。そのうちの或る部分が下溝へ移って座間姓を名のった、と考えれば、下溝に座間姓の多いのも、辻つまが合うことになる。

次に、江戸時代末期に幕府により編集された、新編武蔵国風土記稿の都筑郡池辺村（横浜市港北区池辺町）の項に、だいたい次のような記事がある。

旧家で名主の座間金蔵の祖先は座間某といい、永祿（一五五八～七〇）年中、下総の国府台の合戦（永祿七年　北条氏と里見氏の）に、鉄鉋で傷を負い、廃人となって、池辺村へ土着したが、もとの菩提寺は本牧の妙蓮寺だという。大炊介法号を常蓮といった者もあった。

また元和三年（一六一七）に再建された池辺村長王寺の棟札には、座間織部と座間浄蓮の名が出ている。

ほかに、小田原北条氏の部下鈴木某の知行していた隣村の茅ケ崎村では、永祿四年（一五六一）の文書に、座間豊後守と座間彌三郎の名がみえる。更に折本村は小田原北条家の部下座間新左衛門が知行していた。

右の記事のうち、折本村を座間新左衛門が知行していた、というのは見逃がせない。というのは、戦国末から開拓がされていた新田宿に「折本」という姓があるからである。他に折本という地名も聞かないし、恐らく折本村の出身者であればこそ、座間の新田宿へ来て「折本」姓を名のったものであろう。このように、座間と折本村と交流があったとすれ

ば、折本村の領主座間新左衛門が座間出身者であったことは十分考えられよう。こうなると、大体横浜市港北区の座間姓の者は、座間出身者の子孫であると云ってもよいだろう。

これと同様に、信濃国へ土着した座間出身者と思われる人もある。昨四八年秋の文化祭に座間敏生という東京の人が、公民館へたずねてみえた。同氏は長野県松本市出身で、同地には座間姓の家が何戸かあり、先祖は甲斐武田氏の部下だったと伝えている由である。

相模国出身で武田家の家臣になるというのはおかしい気もするが、北条氏康の八男氏秀は、一時武田信玄の養子になっていたことがあるので、氏秀に従って行った座間出身者が氏秀の離縁後も、そのまま武田家に止まっていた、というようなことも考えられる。そのへんのところを確めてみたいものである。

このほかよく調べていないが、座間姓は逗子市にもある模様であるし、千葉県沼南町にもある。幸徳秋水の弁護活動をした新聞記者にもあった。岐阜県下にもあるが、これは「ザンマ」と呼ぶそうである。

注意したいのは、大阪市に「座摩」神社というのがあり、平安時代末まで、皇居の中に「坐摩神」が祀られていたことである。（座摩神社と坐摩神については、本書「夷参と座間」三七頁参照）これらの神社に関係した者も「座間」と名のっているかも知れない。

以上のようにして、「座間」に限らず、姓というものは、歴史にかかわるところが深い。

もし全国から集っている市民が、「座間」という姓についての情報を持ち寄ったら、座間の歴史に関する興味深いことがわかってくるかも知れない。お心当りの方に、お知らせを願いたいものである。

〔追記〕　姓氏家系大辞典の「座間」の項では、大阪に座摩神社が鎮座し、ヰガスリの神を祀ること、座間氏は相模の座間より起り、戦国末期座間某が都筑郡茅ケ崎を領し、座間豊後守、坐間弥三郎等がいたことを記し、「なお信濃にも存す」とあるのみである。

刀匠周広伝

飯島忠雄

昭和四二年五月十一日、座間町教育委員会では、座間中宿三一〇四番地鈴木周広氏所蔵の刀剣一振を重要文化財に指定致しました。その形状は次の通りです。平造刃長三八・七糎　身巾三・一糎　反り〇・七糎　三ッ棟　中子先細り　白鞘　銘相州住綱広　当時は錆刀でしたが、昭和四八年十月に研ぎ上げました。鍛えは小もくめの鍛えで、刃文は直刃に小乱の入った沸えのこまかい匂いの深い綱広の作刀の内でも上作と見られる傑作です。銘のたがねの具合からこの刀は綱広初代の作刀で、相模国風土記稿にも家伝の由緒が記載されて居ります。綱広は鎌倉雪の下に代々鍛冶を業として、鎌倉伝を継承した名門の刀匠です。

鈴木家の記録の中に、我先祖の刀鍛冶周広は綱広の門人也、とある外、周広の鍛冶に関する資料はありませんが、周広の刀匠を実証する四点の鍛冶文書が秘蔵されています。この四点の文書は、北条氏康、北条氏照、大石道俊の三名の書状と名字状一通で、神奈川県下に是だけ揃った鍛冶文書は他に発見されていない物であり、八王子、東京都下にも沢山刀匠が居りましたが、鈴木家の文書は刀剣史料として貴重な物であると思われますので、昭和四一年五月十七日　刀剣に先立って町の重要文化財古文四一―一号に指定致しました

以下四点の文書を原文と内容を文書の年代順に説明しましょう。

一号　道俊書状　奉書包紙

鍛冶又四郎此方座間ニ今居住候　然処方々之鍛冶共郷中へ越候由申候　相似合之役いたさすバ　又四郎　下たる可候　此旨鍛冶ニ可被為知之候　恐々謹言

六月四日　道俊　花押

（包紙）中務丞殿　真□り

〔解読〕鍛冶の又四郎は座間に住ませておいたが、郷中（武州滝山城を指す）の刀鍛冶の連中も又四郎を呼び寄せることに賛成している。相応の役目につかせてやるから、又四郎は滝山城下へ下って来い（上りは京都を目指し、下りはその逆）この事を鍛冶の又四郎に伝えてくれ。という文書です。又四郎は周広の俗名です。宛名の中務丞という人物は鈴木家の人ではないらしく、鈴木家の過去帳には見えませんので、当時の座間の地頭か名主（みようじゅ）であるかも知れません。

大石道俊書状

（包紙は略す）

ここで又四郎を滝山城に呼び寄せた道俊という人物について述べてみましょう。道俊は実名は大石源左エ門尉定久と言い、遠祖は木曽義仲で十数代後の未裔に当り、代々信州の山の中の大石村に住んで居りました。室町時代の初期応永四年頃関東管領の上杉氏から武蔵国の目代を委任され、管領家の重臣として迎えられて、信州から武蔵国由木庄（八王子市）に移住しました。代々由木に住して居りその領地を由井領といいました。その範囲は八王子周辺と由木周辺から相模原市までで、石高は江戸時代の換算で三万石（推定）と言われています。

室町末期の明応年間に小田原城を攻取った北条早雲と二代氏康によって約四〇年間に武蔵、相模は攻取られてしまい、管領上杉氏の領分は埼玉県の一部を残すだけで、殆ど北条氏の領地となって、上杉氏は上野国（群馬県）に後退した。武蔵目代の大石氏は、目代とは名ばかりで自領の由井領だけを守備するのが精一杯で、北条領の中に大石氏だけが取り残

されたので、道俊の二代前の大石憲重は萬策つきて北条氏康に降服し、上杉氏に叛いたのです。以後北条氏の指揮下に入り、天文十四年四月の河越夜戦の時は北条軍として上杉氏を亡す合戦に参加したのです。

天文十二年源左衛門定久は子息に家督を譲って入道しました。法号を心月斉又は真月斉と号した。道俊は北条氏に忠誠をつくす行為として、自領内の刀鍛冶を自分の城の滝山城下に集めて、北条氏のために刀の生産を計画しました。招状の中で「方〻の鍛冶共」とあるのは、八王子恩方の周重、昭重、康重、その外案下、下原、滋護寺等の刀匠達、外に小田原城下の政俊、鎌倉の綱広等も現住所に於て天文五年頃から北条家のために鍛刀して居ります。周広も綱広門人であった関係から綱広が周広の技倆を北条家に推挙した結果、北条氏に召抱えられるようになったとも思考されます。したがって、道俊の招き状は、書状の包紙の表に真月斉の真の一字があることから、この書状は天文十二年か十三年の何れかの年に差出されたものと思えます。

二号　周広名字状

周広

天文十四年正月廿二日

総周　花押

天文十二年か十三年に又四郎は滝山城下に弟子を連れて移り、北条氏のために鍛刀に従事しました。早速周広という匠名を戴いたのですが、匠名を付けた「総周」という人物は誰であろうかと、永い年月に調べて居りましたがわかりませんでした。ところが最近大石氏の身辺と北条氏との関係を調べていたら、偶然該当者と覚しき人物が出て参りました。その「総周」という人は、天文十二年に大石定久は子息の宗仲に家督を譲って滝山城から戸倉城（武州）に移りました。戸倉城の定久隠居の城に北条氏は松田肥後守（赤備の指揮官）の子息松田縄周を養子という名儀で城代に入れました。この縄周が北条氏の刀奉行であって、各地から集った刀匠の取締役であったろうと思われます。周広の外下原の周重も刀奉行からもらった匠名と思われ、二人共同期の優秀刀工であるので、総周と関連性が強く浮出されているのです。滝山城下で鍛えた刀の中に「依北条大楽殿氏照公命於滝山城下作弘治二年八月日、武州下原住山本藤右エ門康重」という一刀が八王子市内の愛刀家により所持されて居ります。「北条大楽」は大石定久の甥に当る武士で大石大学之助と言った人で、大石氏が北条氏に随身したところから北条氏を称したのでしょうが、刀の銘文からしても氏照が命じて康重に「大学之助」のために刀を鍛えさせたということがうなずけます。

三号　北条氏召抱状(I)

屋敷分如前〻相抱公方御用　可走廻由被仰出者也仍如件　壬戌　八月十五日　藤曲

鈴木彌五郎殿

（解読）屋敷分前々の如く　あいかかへ　くぼう御用走り回るべき由おおせ出さるる者也

壬戌は永祿五年であります。

天文十二年か十三年に滝山城下に招かれた周広は十数年間そこで鍛刀していましたが、大石氏の養子となっていた北条氏照は大石氏から離れて北条氏に戻り、滝山城は定久の子息宗仲が相続し、氏照は八王子に八王子城を築いて城主となりました。したがって滝山城下に集って居た刀匠団も同時に滝山城下を解散し、各自の出身地に帰ることになりました周広も座間に帰り鍛刀するようになったのでしょう。氏照が北条氏に選った翌々年の永祿五年に氏照は治領内の周広の生地座間に改めて召抱えの公文書を下付したものと前記の文書を解釈します。この場合、屋敷分前々の如く、とは他の刀匠に下付したのと同文の文書で、周広には「屋敷分」に当る土地は生地の座間入谷長宿、円教寺の東側の約一反五畝ほどの宅地が是に該当するのです。此の頃から鈴木家の代々の相続後の名は彌五郎と彌太郎が交互に使用され、明治期まで続いています。

四号　北条家召抱状(II)

棟別銭　諸役御赦免候　公方御用無々沙汰

可走回然者年々鑓二丁つつ可被下仰　出者
也仍如件　丑　十二月三日　進藤奉之　座
間鈴木□□□□

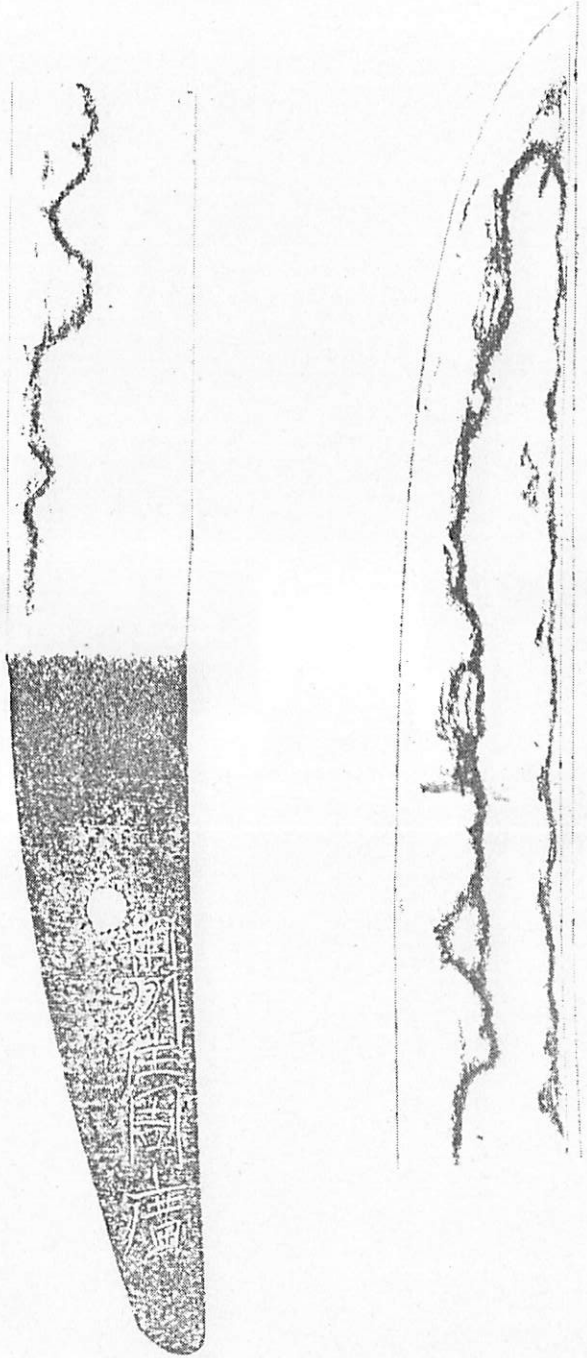
〔解読〕棟別銭（家屋税）ならびに諸役御赦免候　公方（氏政）の御用は　無沙汰なく走り回るべし　然らは年々やり二丁（足軽は槍組であるから槍一本を一人として二人分）下さるるものなり。よってくだんの如し。と云うので、要するに税金を免除した上、足軽二人分の給金を与えるから、公方の御用は怠らず勤めよ、ということです。奉之は、これをうけたまわる、と読みます。丑は永禄八年に当り印章は如意成就ですから氏照の公印です

この文書は氏康が引退死亡して四代氏政が相続した時季に再度召抱状を下付したもので宛名は相州古文書では、鈴木弥五郎殿です。

最後に周広の作刀が日本のどこかに残されているかどうかということです。周広のことは昔の刀剣書には出ていますが、その作刀は見ることはできませんでしたので、何とかしてその遺作を見たいものと念願して、神奈川県誌第一号と、刀剣美術に「周広の刀を探す」と「刀匠周広伝」の二編を寄稿してみました昭和四十三年頃でした。程経て石井昌国氏の処に北海道札幌の土屋さんという人から、刀剣美術に周広のことを寄稿された飯島さんに渡してくれと、周広作刀の押形を送って戴いた。土屋さん所持の周広の作刀は、刃長一尺四寸四分、反り三分三厘、重ね二分二厘、地鉄板目、刃文五（ぐ）ノ目乱小沸付棟焼りという相州伝独特の鍛え方です。銘は「相州住周広」の五字銘で、中心（なかご）先は勢州村正の先に似ていますが、綱広一門の脇指短刀の中心の仕立です。

この外鹿児島県開門岳の開門神社に戦前一尺三寸程の脇指がありましたが、戦後米軍人が持去ったと、開門神社の宮司さんから御知らせがありました。

周広没して約四百年後に奇しくも周広の遺作が北の北海道と南の鹿児島から発見されたのは幸運でした。開門岳の一刀は行方不明にしても、北海道の一刀だけは是非周広の故郷に帰したい一念に燃えているのです。



〔周広刀押形〕　長さ一尺四寸四分。反り三分三厘。重ね二分二厘。真の棟少々急。中心角棟小肉。地鉄板目。刃紋互の目乱れ。小沸付き棟焼有り。

座間市内の寺子屋のはじめと その師匠

鈴木芳夫

江戸時代の一般庶民の教育機関は、云うまでもなく寺子屋。その寺子屋は、純農村であった座間市内では、いつごろ誰が始めたのだろうか。

新田宿の諏訪神社の神官新田英寿家の過去帳に「貞樹　享保四亥（一七一九）天十二月十三日　師匠」という記事がある。この過去帳には他に「師匠」としては、後に書く滝沢仁平につき「手習師匠也」とあるのみで、同家が代々修業して来た修験道の「師」或は「先達」のことは何も記してない。貞樹の享保四年から滝沢仁平の安政五年（後述）まで、約一四〇年の距りがあるので、断定はできないが、「貞樹」と云う名からしても、この「師匠」は「手習師匠」のように思える。もしそうだとすれば、この貞樹が座間市内で寺子屋を開いていた可能性も出てくるが、何しろ他に資料が見当っていないので、貞樹のことについてはこれくらいにしておく。

一　保田安兵衛

前述の貞樹よりもう少し資料があるのは、二百二十年ほど前に死んだ安田保兵衛で、墓碑があり、寺の過去帳に記入されている。

彼の墓碑は四ッ谷の浄土寺にある。同寺の住職広田順我氏に知らせてもらったのだが、四ッ谷の草分けの四家のうちの一家と云われる佐藤家の墓地の傍に、たゞ一基立っている。もとは、もっと墓地の入口に近い方にあったが、広田師が保護のために、最も奥の方へ移されたという。

墓碑の高さは三段の台座とも約一メートルで、当時としては普通の大きさと思われる。

墓碑正面には「梅岸院功誉徳源居士覚位」とあり、その右側に「宝暦二申天」、左側に「七月廿日」と没年月日を刻み、左側面に「因幡国　俗名保田安兵衛」、右側面に「施主　筆

子　連中」と記してある。

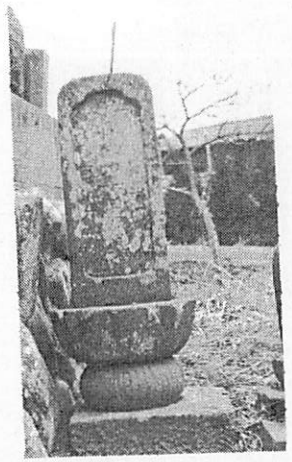
浄土寺の過去帳には、宝暦八年（一七五八）の命日の順序に従った位置に「宝暦二申天七月廿日　梅岸院功誉得源居士」とあり、その下に「手習師匠　俗名保田安兵衛」とあるが享年が記入してない。

この墓碑と過去帳からだけでは、厳密に云えば、保田安兵衛が座間市内で寺子屋を開いていたかどうかわからない。

しかし、同寺の過去帳には、一般に、本人は戒名だけで、俗名も享年も記入がなく、施主の方に住所と名前と続柄とが書いてあり、他所で死亡した者だけが、ほかにその死亡地が記録されている。従い、彼の死亡地の記入がないのは、彼が四ッ谷で死亡したからであり、施主が書いてないのは、それが筆子連中だからで、身よりらしい者がいなかったことを物語っているのであろう。

おそらく生国因幡（鳥取県）の彼は、浄土寺の檀徒ではなかったので、過去帳には記入されず、その七回忌に当る宝暦八年に、筆子達が墓碑を建てて供養したのを機に、始めて過去帳に記入されたのであろう。要するに、墓碑が浄土寺にあるのは、筆子連中が同寺に大きな影響力を持っていたからで、檀徒の分布からみて、彼が四ッ谷に住んで寺子屋を開いていた、と考えるのが素直な解釈であろう。

享年は不明であるが、墓碑の規模からみて相当数の筆子もいたであろうし、寺子屋を開いていたのも、二年や三年とは思えない。普通に五十才から六十才くらいで死亡したとすれば、およそ享保（一七一八～三六）以降八代将軍吉宗の頃には、寺子屋を開いていたと考えられる。そのほか因幡国から来て四ッ谷に落ち着いた理由など、全く判らない。



保田安兵衛の墓

四ッ谷浄土墓地

それにしても、将軍吉宗の頃と云えば、寺子屋が大いに奨励され、江戸市中の手習師匠は八百人くらいいるといわれていたが、地方での普及はそれほどではなかった。その時代にあって、相模川畔の四十戸ほどの四ッ谷村近隣の新田宿七十戸、下今泉六十戸という、基盤の小さな土地に、手習師匠がいたという事実は、注目すべきことと思われる。

二　滝沢仁平

前項の保田安兵衛よりも明確なのは、一二〇年ほど前に死んだ滝沢仁平である。彼は座間上宿の稲垣寿春氏の四代前の祖父に当るが同家は火災に遇っているため、文献的資料は残っていない。現在見当っている資料は次のようなものである。

(一)　墓碑

墓碑は座間入谷星谷寺の墓地の不断桜の北側にある。三段の台座とも高さ約一・二メートルの、かなり立派なものである。座間上宿の宗仲寺の墓地にも、ほぼ同大同形のものがあるが、これは稲垣家が檀那寺を替えたためで、門弟の名（後述）は記してない。

正面に「学寿賢道法師　源性妙智大姉　位」と、夫妻の戒名を併記し、右側面に「安政五午年二月十日　甲斐国産」と命日と生国、左側面に「嘉永二酉年八月五日　倅稲垣仁兵衛」と妻の命日と後嗣の姓名、裏面に「明治六酉歳五月吉日建之」と建碑年月日が記してある。

また台座三段のうち上の二段の三方に、建碑に関係した門弟の名が刻んである。このほか傍にもう一基、二段の台座とも高さ約〇。八メートルの石碑があり、この碑面と上の台座との三方に、矢張り門弟名が刻んである。その門弟の総数は一四六名で、みな居住部落名が記されている。

なお、星谷寺の過去帳には、戒名と施主名のほか、享年八十二才と書かれている。

(二)　新田英寿家過去帳

最初にのべた新田英寿家の過去帳に、次のような記事がある。文中の英雄、秀光、

珍丈、祐岩はみな新田家の子弟で、珍丈は次に出てくる新田一胤の旧名である。

安政五午天二月十日　学寿賢道法師　是ハ甲斐産人也当国高座郡座間村稲垣仁兵衛ニ而葬ス英雄秀光至リ珍丈祐岩元法印右四名手習師匠也

(三)　新田一胤筆塚碑

新田一胤は前記新田英寿氏の祖父で、明治二十七年門弟が紀念碑を建てた。その碑文の一部

（前略）先生（一胤）夙ニ故滝沢仁平翁ニ従ッテ游ビ（下略）（原漢文）

(四)　小俣政吉紀念碑

小俣政吉は座間下宿の小俣馨氏の五代前の祖父。明治三十三年に門弟が碑を建てた

（前略）政吉（中略）滝沢雪翁ニ就キ（下略）（原漢文）

なお、新田一胤、祐岩（飯谷龍雄）、小俣政吉（甚右エ門）の名は、前記星谷寺の墓碑に見られる。

さて、右の四つの資料と稲垣家に伝わる話とを綜合すると、大体次のようになる。

滝沢仁平は山梨県（それ以上詳細には判らない）の出身、どういう事情でか、はじめは下今泉に落ち着き、林光庵という寺子屋を開いたが、座間の稲垣家の娘と結婚、座間の上宿に移り、引続き林光庵と称し、子弟の教育に当った。林光庵と云う名称や、法師という戒名からして、僧形をしていたのではないかとも思われる。「雪」とは雅号であろうか。

前記一四六名の門弟の姓名から判断すると林光庵は寺子屋程度のものから、より高級な漢学塾も兼ていたようで、寄宿生もいたという。墓碑を建てたのは、死後十五年後であるし、一四六名というのは、明治六年当時生存していた門弟の一部であろうが、恐らく北は下溝（相模原市）、南は河原口（海老名市）あたりに至る、南北十余キロメートルに及ぶ範囲の者が、林光庵に学んでいると思われるし、名主や戸長になった有力者も多い。

そこで、下今泉へ来た時期と上宿へ移った時期とである。享年八十二才であるから、安

政五年（一八五八）から逆算して、安永六年（一七七七）の出生である。前記新田家の過去帳に出てくる英雄は、寛政九年（一七九七）生れで、滝沢仁平がその手習師匠となり、また下今泉で結婚していることから考えれば、彼が下今泉へ来て林光庵を開いたのは、およそ彼の二十四才に当る、寛政十二年（一八〇〇）頃ではなかったかと思はれる。

次に座間上宿に移った年代は、というと、以下に述べる寿明院円隆が関係してくる。

三　寿明院円隆

円隆は前記新田英寿氏の四代前の祖父で、諏訪明神の別当（神官）新田山寿明院昌清寺昌元坊の第七世に当る。同家では代々修験道を修練してきたが、円隆は、明和六年（一七六四）出生、二十才と四十三才の時、大峰山に入って修業、天保四年（一八三三）七十才で没した。

彼もまた寺子屋を開いている。その時期は明確に記録してないが、後嗣の英雄が弘化三年（一八四六）に整理した「筆子例年机定控帳」によれば、文化十三年（一八一六）と推定される。

この控帳は毎年一月二十五日現在で、その年修学する筆子の姓名と出身部落名を記したもので、毎年の新入生も明確になっている。それが文化十三年から始まっており、その年は新入生しか書いてない。従って、遅くともこの年に円隆の寺子屋は始まったと考えられよう。

さて、滝沢仁平の座間移転の時期である。この控帳によれば、文化十三年には、新田宿の者だけ九名が入門しているが、翌年は新田宿二名に対し、座間の上、中、下宿の者合せて十一名である。そして、座間の上、中、下宿の者は第三年目には一名もなく、第四、第五年目に二名づつ、第六年目に一名で、第七年目以降は一名もない。これによれば、文化十三年より二年経た文政元年（一八一八）以後、座間地域に別な寺子屋が出来たことが推測される。とすれば、滝沢仁平の座間上宿移転は文政元年頃、円隆の寺子屋開始より僅か

に遅れてであると考えられる。

ともあれ滝沢仁平と円隆とは、文化十三年前後に、相前後して座間市内に寺子屋を開いたことは確実である。

文化十三年と云えば、既に保田安兵衛が死んでから、六十余年を経過している。その間座間市域内に寺子屋が絶無だったとも考えられないが、現在何の資料も見当っていない。

それにしても関東の農村部としては、寺子屋が多く出来はじめたのはこの時期以後で、たとえば、現在の相模原市磯部の栗山半左ェ門が開塾したのは嘉永二年（一八四九）のことである。この意味で、滝沢仁平と寿命院円隆とは注目されてよいと思ふ。

特に円隆の寺子屋は筆子名簿が残っていることで重要である。たとえばこの控帳によれば、円隆は文化十三年よりその死に至る十七年間に、年平均二十六名、実人員百をこえる筆子を教育している。また戸数七十の新田宿では、文化十三年より弘化三年に至る二十九年間に、一〇四名の子弟（女子はなかった）寺子屋で学んだ。更に新田宿出身筆子の平均修業年限は、最初の九年で四年と少々、後期の九年で五年二ケ月である（他部落の者はやゝ短い）。これらのことは、相模川中流城農村部における教育の普及度を物語っているものと思はれる。

四　そのほかの人々

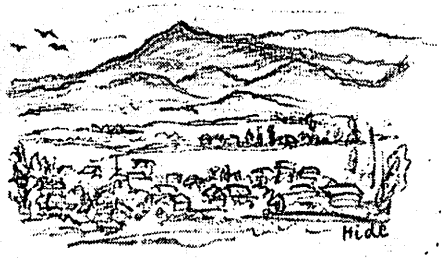
寿命院円隆の後は、前述のように、英雄、一胤と継ぎ、一胤はその寺子屋を新月堂と称し、明治六年（一八七三）公立小学校が出来るまで続けた。そして前記その筆塚碑には一六一名の門弟が名を連らねている。

小俣政吉は前述の通り、滝沢仁平に学び、天保八年（一八三七）より五十三年間、明治二十二年に至るまで、座間下宿で寺子屋を開いていて、その紀念碑には四二名の人の名が記してある。

このほか、明治二十九年に亡くなった座間入谷長宿の斉藤喜三郎（斉藤隆寿氏曽祖父）も、滝沢仁平に学んで、塾を開いている。

栗原においても、文久二年（一八六二）下

栗原に誠志館という塾が出来（これが現在の栗原小学校につながっている）、林良諦や荒川朴斉等の師匠がいたが、これらのことについては次の機会に述べてみたいと思う。



あとがき

◇〃座間むかしむかし〃の第二集発行から既に十余年が過ぎました。この間当市は人口が驚異的に増え、今や七万人をこえ、宅地造成も急激に進み、地形も人心も変りました。

◇このような情勢から、消え去ろうとするものを保存しよう、古くから伝えられて来た昔話などを発掘しよう、というような気持が、一面では特に盛んになつて来ました。本誌の発行もこうした気運にこたえようとするもので、引続き発行してゆきたいと思います。

◇本誌は内容別に二部に分けましたが、厳密な区分ではなく、民話的なものの中からも、意外な資料が見つかるかも知れません。

◇本誌により、当市の歴史に興味を覚え、進んで新事実を究明しようとする運動が盛んになれば、編者の大きな喜びです。

◇挿図の使用をお許し下された鎌倉市立図書館と有隣堂、そのほかいろいろ御協力を賜わつた方々に、厚く御礼申し上げます。

昭和四九年三月十日

編者

再刊にあたって

座間むかしむかしシリーズは、市民が市の歴史に親しむ身近な資料としてご好評いただいておりますが、残念ながら第一、第二、第三集はそれぞれ絶版となってしまいましたので、皆様方のご要望に応え、そのうち昭和四十九年に発刊しました第三集を文化財保護協会のご協力をいただき再刊することにいたしました。

なお、この座間むかしむかしシリーズは市民の皆様方にご好評をいただきながら、第五集発刊をめざし準備しております。どうかご期待下さい。

また、市民の皆様方に広くご愛読いただければ幸いです。

昭和五十五年三月

座間市教育委員会

昭和四十九年五月二十日　初版刊行
昭和五十五年三月三十一日第二刷刊行
編集者　座間市文化財保護委員会
発行者　座間市教育委員会
座間市座間二丁目二八八二
〇四六二（五五）三一三一
座間市文化財保護協会
印刷者　篠原印刷株式会社
座間市相模台一〇七九
〇四六二（五三）六六一五～六

座間市略年表

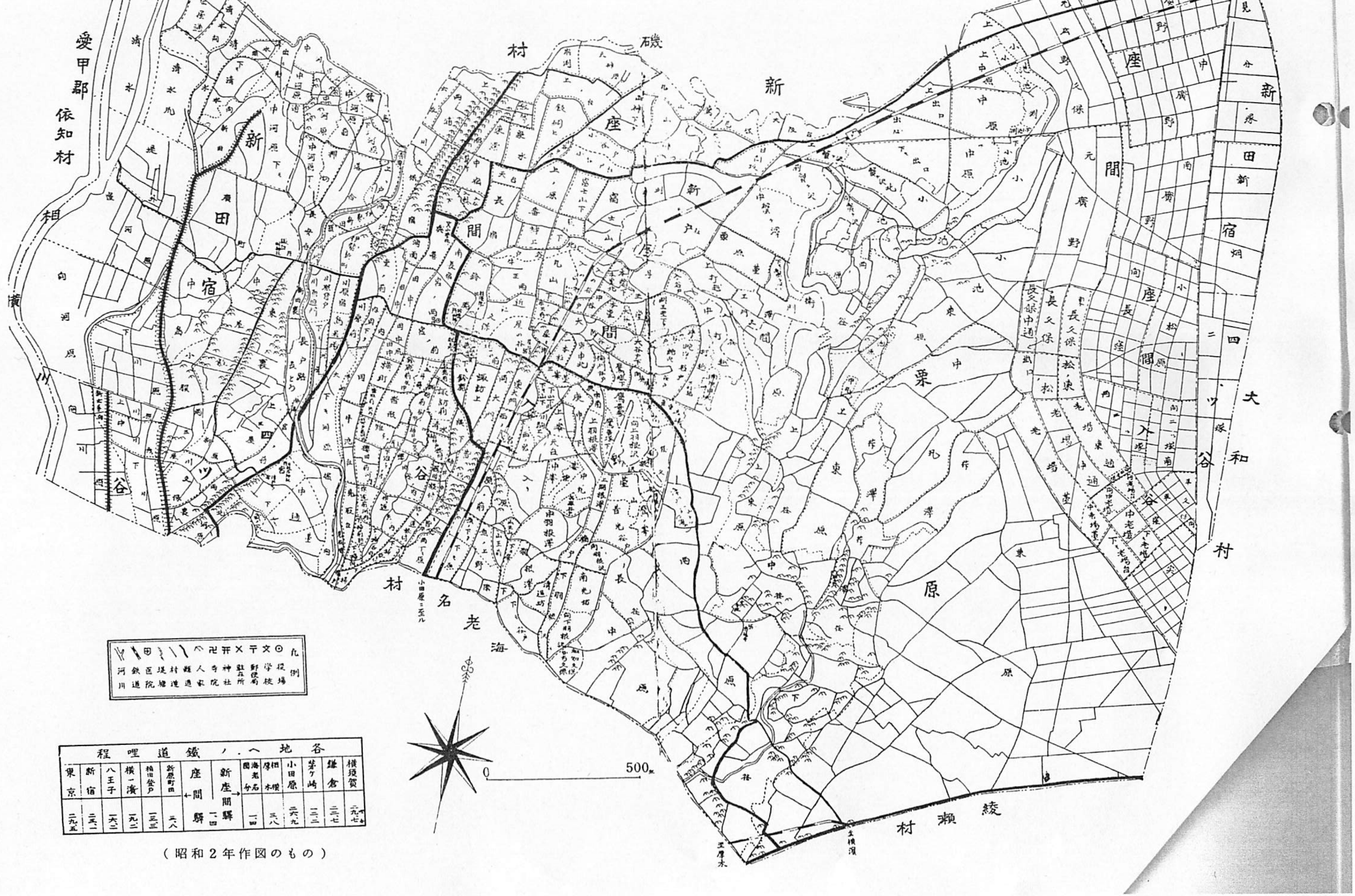
（※印は市指定重要文化財）

時代	西暦及び和暦	日本に関連する記事	座間市に関連する記事
縄文時代	前四〇〇〇頃	縄文時代早期末、海面上昇約五米	茅山式土器片座間神社付近・打越（緑が丘南西部）等に散布
	前三〇〇〇頃～	〃　前期末	諸磯式土器片星の台・芹沢等より出土
	前二五〇〇頃	〃　中期	五領が台式遺跡が緑が丘南東部、阿玉台・勝坂・加曽利E式等の遺跡が、鎧ケ沢・小池谷・芹沢・下栗原・座間神社等に分布
	前二〇〇〇頃	〃　後期前半	掘ノ内式遺跡が鎧が沢・芹沢・下栗原・鈴鹿神社等に、加曽利B式遺跡が星の台・間ノ原等に分布（註　右の遺跡の中には既に消失したものもある）
弥生時代	二〇〇頃	弥生時代に入る。稲作技術北九州に伝わり、間もなく近畿まで広がる	弥生文化県下一帯に波及。海老名市上今泉にこの頃の土器出土
	二四八	弥生時代後期、静岡県登呂遺跡	
	五三四・安閑	倭の女王卑弥呼死す（魏志倭人伝）	この時代の土器（鬼高式）片座間電報電話局より出土
古墳時代	天皇1	武蔵国造家内乱、この後天皇家多摩丘陵等に屯倉（みやけ、領地）設置	この前後、海老名市上今泉の秋葉山前方後円墳群（四基）築造される
	大化1	大化の改新なる	この後海老名群地に条里作られる（国道二四六号は当時の畦道を拡巾したもの）
	六七二・天武1	壬申の乱	高座郡の名初めて国史に出現「相模国日　高座郡女生三明」（日本書紀天武紀）
	六七三・天武2		この時代から奈良時代にかけて「横穴」（古墳）が多く築造され、※鈴鹿一号墳を始め、梨の木坂・椚下・羽根沢・榮福寺北・遍礼坂等の横穴群出来る
飛鳥時代	七一〇・和銅3	平城京（奈良）が都となる	このやや後、東海道の官道が座間の地を通過、千葉県市川市国府台に至る
	七七一・宝亀2	武蔵国の所管を東山道より東海道に移す。この頃万葉集が出来る。平安京（京都）が都となる	「……今東海道ハ相模国夷参駅ヨリ下総国ニ達ス　其ノ間四駅……」（続日本紀光仁紀）との記録があり、夷参（いさま）駅は今の座間市域と考えられる
奈良時代	七九四・延暦13		相模国分寺（海老名市国分）火災　（日本後紀）
	八一九・弘仁10	僧空海（弘法大師）死ぬ	相模川に浮橋を架する（今の相模原市田名のあたりか）（続日本後紀）
	八三五・承和2		高座郡大領（長官）壬生黒成人口増・貧民救済等の功により位階昇進（同前書）
	八四一・承和8		石楯尾神社（今の鈴鹿の源訪神社との説がある）従五位下に叙位（三代実録）
	八六九・貞観11		寒川神社（寒川町）従四位下よりその上へ、有鹿神社従五位下よりその上へ昇進
	八七八・元慶2	延喜式が完成	関東地方に大地震、相模・武蔵地方が最も甚しい（同前書）
	九二七・延長5		高座郡の名神六社　「大庭神社　深見神社　宇都母知神社　寒川神社（大社）　有鹿神社　石楯尾神社」（いわゆる式内社）が定まる（延喜式）
平安時代	九三一・承平1	承平年間（九三八まで）倭名類聚鈔（倭名抄と略称）出来る	倭名抄高座郡郷名「美濃　伊参　有鹿　深見　高座　淵辺　寒川　塩田　二宝　岡本　土甘　河会　大庭」このうち「伊参（いさま）」が座間地域
	一〇四四・寛徳1		星谷寺縁起（星の谷）梵鐘寄銘、寄進者は佐々木信綱及び沙弥西願
	一〇五六・天喜4	前九年の役起る。源頼義活躍	※円教寺金銅写経はこの頃のものか
	一〇七一・延久3	後三年の役終る。源義家活躍	領綱樋現社（座間神社の前身）勧請と伝える
	一〇八七・寛治1	保元の乱起り、源為義切らる	
	一一五六・保元1	平治の乱起り、源義朝ら敗死	この頃「座間郷」と書いた文書が出現（鎌倉市立図書館蔵　佐々木信綱の子孫高秀の文書）
	一一五九・平治1	平清盛太政大臣となる	翌年源頼朝伊豆に流される。この後義朝に味方した佐々木秀義（近江源氏）追われて相模に来り、渋谷重国（藤沢市長後付近に在住）をたよって滞留
	一一六七・仁安2	源頼朝伊豆に挙兵、石橋山の合戦	佐々木秀義父子、渋谷重国一族ら頼朝に従って活躍
	一一八〇・治承4	墳の浦の合戦、平氏滅亡	
	一一八五・文治1	源頼朝鎌倉に幕府を開く	和田合戦、和田義盛、渋谷武重（重国の子）ら敗死
	一一九二・建久3		佐々木信綱（秀義の孫）は鎌倉方に加わって軍功をあらわす
	一二一一・建暦3	承久の乱、佐々木氏の一族多く敗死	星谷寺縁起（星の谷）梵鐘寄銘、寄進者は佐々木信綱及び沙弥西願
	一二二一・承久3		※円教寺金銅写経はこの頃のものか
	一二二七・嘉祿3	日蓮上人誕の口に斬られようとする	領綱樋現社（座間神社の前身）勧請と伝える
	一二七一・文永8	元軍来襲して覆滅（文永の役）	
	一二七四・文永11		この頃「座間郷」と書いた文書が出現（鎌倉市立図書館蔵　佐々木信綱の子孫高秀の文書）
	一三三三・正和2	鎌倉幕府亡び、建武中興成る	翌年源頼朝伊豆に流される。この後義朝に味方した佐々木秀義（近江源氏）追われて相模に来り、渋谷重国（藤沢市長後付近に在住）をたよって滞留
	一三三三・元弘3	この頃南北朝の争乱続く	佐々木秀義父子、渋谷重国一族ら頼朝に従って活躍
鎌倉時代	一三五四・文和3		和田合戦、和田義盛、渋谷武重（重国の子）ら敗死
	（南朝正平9）		佐々木信綱（秀義の孫）は鎌倉方に加わって軍功をあらわす
	一三九六・応永3	永享の乱、関東地方に争乱起る	星谷寺縁起（星の谷）梵鐘寄銘、寄進者は佐々木信綱及び沙弥西願
	一四三九・永享11		※円教寺金銅写経はこの頃のものか
	一四四四・文安1		領綱樋現社（座間神社の前身）勧請と伝える
	一四八六・文明18	応仁の乱起り、京都戦乱の巷となる	茅山式土器片座間神社付近・打越（緑が丘南西部）等に散布
	一四九五・明応4	上杉定正部下の太田道灌を殺す	諸磯式土器片星の台・芹沢等より出土
	一五三二・天文2	戦国時代にはいる	五領が台式遺跡が緑が丘南東部、阿玉台・勝坂・加曽利E式等の遺跡が、鎧ケ沢・小池谷・芹沢・下栗原・座間神社等に分布
	一五四一・天文10		掘ノ内式遺跡が鎧が沢・芹沢・下栗原・鈴鹿神社等に、加曽利B式遺跡が星の台・間ノ原等に分布（註　右の遺跡の中には既に消失したものもある）
	一五四五・天文14	西洋人渡来	
	一五四七・天文16	翌年足利晴氏上杉憲政、北条氏康と河越城に戦う	
	一五五三・天文22		
	一五五六・弘治2	上杉謙信と武田信玄川中島で戦う	
	一五六二・永禄5	織田信長清洲城に拠る	
室町時代（戦国時代）	一五六五・永禄8	前々年上杉謙信小田原城を攻め、織田信長今川義元をほろぼす	
	一五六六・永禄12	前年北条氏康里見義弘を千葉県国府台に破る	
	一五七一・元亀2	織田信長延暦寺を攻める	
	一五七三・天正1	足利幕府滅びる。武田信玄死す	
	一五七五・天正3	翌年織田信長安土城（滋賀県）を築く	
	一五八二・天正10	武田勝頼織田信長に亡ぼされ、織田信長明智光秀に殺される	
	一五九〇・天正18	豊臣秀吉小田原城を攻略、北条氏滅びる。徳川家康江戸城に入る	
	一五九三・文禄2	前年豊臣秀吉朝鮮進出開始	
	一六〇三・慶長8	徳川家康江戸に幕府を開く	
	一六一五・元和1	大阪夏の陣、豊臣氏滅びる	
	一六一六・元和2	徳川家康駿府にて死ぬ	
	一六一八・元和4		
	一六二四・寛永1	前年徳川家光将軍となる	
	一六三四・寛永11	前年鎖国令が出される	
	一六三六・寛永13	前年参勤交代の制始まる	
江戸時代	一六四六・正保3		
	一六六一・寛文1		
	一六八三・天和3	翌々年赤穂浪士吉良義央を討つ	
	一六九九・元禄12		
	一七〇六・宝永3		

時代	西暦及び和暦	日本に関連する記事	座間市に関連する記事
江戸時代	一七〇七・宝永4	富士山噴火、宝永山出来る	駿河、相模、武蔵の被害が大きく、その時の火山灰の埋れた所が今も市内にある
	一七一六・享保1	徳川吉宗将軍となる、享保の改革	この頃以後市内各村は旗本の知行地となって細分され、明治に至る
	一七一九・享保4		手習師匠貞樹死す（新田宿新田家過去帳）
	一七四九・寛延2		野火により焼失した星谷寺観音堂本堂山（谷戸）より現在地に移ると伝える
			※星谷寺咲き分け散り椿の植えられたのはこの頃か
	一七五二・宝暦2		手習師匠保田安兵衛死ぬ（浄土寺過去帳　墓碑銘）
	一七七八・安永7		星谷寺観音堂遊宮費を募集したが、十分集まらず、資金不足で未完成に終る
	一七一六・文化13		新田宿の横田（現新田）円隆寺子屋新月堂を開き、明治五年まで存続、この二、三年後（年代不詳）に滝沢仁平（山梨県の人）林光庵（塾）を座間上宿に開設
			※片野家（座間上宿）の桑樹この頃植えられる。横田円隆死ぬ
	一七四九・寛延2		風土記稿によるこの頃の知行主（座間宿村）勝田帯刀　大久保教文（座間入谷村）酒井弥門（栗原村）太田資統、山田立長、増田寿春（新田宿村）岡部長玄（四ツ谷村）戸田親負、森川鎌三郎、高木富太郎（座間宿村）また同書による戸数（座間宿村）一七五、（座間入谷村）一五九、（栗原村）一七〇、（新田宿村）七三、（四ツ谷村）四〇、合計六一七。別書によるこの頃の石高、（座間宿村）七七七、（座間入谷村）六六三、（栗原村）五九〇、（新田宿村）三二九、（四ツ谷村）二四六、合計二、六〇五
	一八三三・天保4		この頃芝原（相模台から栗原東原にかけて）開拓始まり、断続して明治に至る
	一八四一・天保12		関東大地震（大正十二）よりは弱かったという
			滝沢仁平死す（紀念碑が星谷寺墓地にある）
			この頃栗原村弥市（大矢）浦賀の台場構築のため幕府に数万両を用立てたという
			座間の俳人三桃、半黛の名、俳諧名寄に見える
			星谷寺観音堂の杉並木（今の大門通り）切られる
			全市神奈川県の所管に入る
	一八三三・天保4	ロシヤ船北海道に来る	心岩寺（座間入谷）焼失する
	一八四一・天保12	天保の大飢饉はじまる	座間神社（飯綱権現の後身）が出来る
		新編相模国風土記稿完成	寺子屋新月堂廃す、寺子生三五人。新たに風牛学舎（座間宿村）片野要助、（座間入谷村）飯島国保、（栗原村）大矢弥市、（新田宿村）加藤直右衛門、（四ツ谷村）佐藤七左衛門
		この頃より、ようやく外国との事件が多い	四ツ谷の各村）と協同学舎（海老名市内の柏ケ谷、上今泉、下今泉の各村）が開設される
			戸長（従来の名主などに替るもの）選出される（座間宿村）片野要助、（座間入谷村）飯島国保、（栗原村）大矢弥市、（新田宿村）加藤直右衛門、（四ツ谷村）
	一八四一・天保12		栗原村協同学舎を単独経営、風牛学舎座間学校と座間村学校に分れる。竜源院（座間入谷）豪雨のため全壊、風牛学舎教頭中村常一圧死（紀念碑竜源院）。芝原の開墾再開、村の全戸に均分、二三年間に百余町歩を開く
	一八五三・嘉永6		高座郡下に小作争議が起り、地主の家が焼打ちされる。宗仲寺火災
	一八五五・安政2		座間入谷出身の瀬戸清吉大阪府堺で西郷軍の武器買付けをし、明治二二年日本郵船会社設立発起人となったという。現存する座間市最古の戸籍簿作られる。一月一日現在の戸籍簿人口三、七八六人
	一八五八・安政5		郡区町村編成法により、座間宿、座間入谷、栗原、新田宿、四ツ谷の各村に戸長役場を開設する。座間宿村と座間入谷村争い、遂に且那寺を替え合うに至る
	一八六〇・万延1		栗原学校を下谷四〇六六より中谷三一〇六（専福寺）に移し二階建とする
			座間宿村々民ら中和田新開（相模原市小田急相模原駅前）を開く
	一八六七・慶応3	将軍徳川慶喜大政を奉還、江戸幕府亡び、王制復古	座間入谷村外四ケ村運合の戸長役場を座間入谷鈴鹿三五一四に置く、戸長は大矢弥市。飢饉が起り出生率はとんど半分に低下
			大矢正夫（栗原出身自由党員、北村透谷友人）連合戸長役場をおそい税金を奪取
			朝鮮渡航の資金としたが、同志と共に捕えられる（大阪事件に連座）
	一八六八・明治1	「五ケ条の御誓文」発布。江戸を東京と改称、翌年都を移す	翌年、日新（座間入谷村）・真誠（座間宿村）・湘川（新田宿村と四ツ谷村）・馴養（栗原村）の各小学校を開設
			前年町村制公布、五ケ村の外新戸村飛地（通称新戸谷戸）を合せ、座間村を形成
			初代村長片野要助
	一八七〇・明治3	廃藩置県の詔書が出る	日新、真誠、湘川の三小学校を統合し尋常高等座間小学校（第一小の前身）創立
	一八七一・明治4	学制が発布される。新橋・横浜間の鉄道開通	座間入谷皆原の人ら皆原新開（現小松原）を開拓。座間郵便局（現中宿）開設
	一八七二・明治5		電話初めて設置（但し局相互間のみ）
			この頃座間河原宿に今の子供会に似た会発生、明治三四年幼年会と命名、次第に全村に及ぶ
	一八七三・明治6	神奈川小学校規則制定	新田宿大火、飛火して河原宿も大火
		徴兵令布告	各部落に青年会が出来る
	一八七四・明治7	民選議員選出の建白書が提出される	座間村幼年会出来、昭和二〇年（一九四五）頃、職乱にまきれて消滅
	一八七五・明治8	地租改正始まる	座間大通りに初めて電灯つき、順次全市域に普及
	一八七六・明治9		青年たちにより座間村文芸同窓会結成され、会誌を発行。座間村養蚕組合結成
	一八七七・明治10	西南戦争、西郷隆盛戦死	座間村処女会（後の女子青年団）結成される。絹価高く村は好況
	一八七八・明治11		十月一日人口　五、六七四人
	一八七九・明治12	教育令公布。東京府議会開かれる	座間、原町田間に乗合馬車開通
	一八八〇・明治13	区町村会法制定	市域殆どの家屋が損傷、道路、庭等地割れ甚しく、火災は発生せず
	一八八二・明治15	前年国会開設の詔勅出る	高座郡役所（藤沢）廃止される。神中鉄道（現相鉄線）一部開通
	一八八四・明治17	秩父事件、加波山事件など起る	小田急線全通、座間駅（現相武台前駅）新座間駅（現座間駅）開業。現天台、立野台方面に遊園地開かれる
	一八八五・明治18	自由党大阪事件起る	星の谷大火、星の谷観音堂山門焼失。青年有志文芸同人誌「銀河」を発刊
	一八八六・明治19	小学校令制定、尋常科四年を義務制とし、高等科四年をもうけた	村内銀河詩社より短歌誌「おりおん」発行される
	一八八九・明治22	大日本憲法発布。東海道線全通	相模鉄道（現国鉄相模線）開通、座間新戸駅（現相武台下駅）・本座間駅（河原宿後入谷駅に替る）開業。　この頃絹価下落不況となる
	一八九〇・明治23	教育に関する勅語発布	相模川左岸用排水（相模原市磯部―茅ケ崎市）着工、同十五年完成
	一八九五・明治28	前年に起った日清戦争、この年講和	前年より工事中の旧陸軍士官学校九月に移転してくる。十二月二十日旧陸士校卒業式に当り、今上陛下行幸。同日町制施行、初代町長稲垣許四郎
	一八九六・明治29		旧高座郡北部の七ケ町村と合併相模原町を形成
	一九〇〇・明治33		旧陸軍士官学校跡に米軍進駐、キャンプ座間として現在に至る
	一九〇四・明治37	日露戦争起り、翌年講和	農地委員選出され、農地改革始まる。住民食糧に苦しみ、雑炊給食
	一九〇八・明治41	横浜線（横浜～八王子）開通	六三三制施行され、座間中学校創立
	一九一一・明治44	生糸生産高世界第一となる	相模原町より独立、九月一日座間町となる、人口一二、〇三二人。座間町農業協同組合結成される
	一九一三・大正2	第一次欧州大戦起る	座間小学校座間第一小学校と改称、栗原分教場（馴養小、栗原小の後身）を廃し現在地に座間第二小学校を開校
	一九一四・大正3	第一次欧州大戦終る	米極東軍司令部横浜よりキャンプ座間に移転、後在日米陸軍司令部となる。都市計画法適用される
	一九一七・大正6	第一回国勢調査	町公民館開館。町営水道着工、翌年給水開始
	一九一八・大正7	関東大震災、東京、横浜等被害甚大	工場誘致始まり、東洋ナイロンファスナー工場相武台に開設、順次各工場進出。
	一九二〇・大正9	郡制廃止。大正天皇没	座間第三小学校創立。盤ケ沢遺跡、鈴鹿遺跡、根下横穴群を発掘
	一九二一・大正10	金融恐慌起る	日産座間工場開設。座間電報電話局開局
	一九二三・大正12		座間郵便局開局
	一九二六・大正15	第一回普通選挙	西中学校創立
	一九二七・昭和2		役場中央庁舎開庁。文化福祉会館開館。星谷寺嘉祿三年紀梵鐘国の重要文化財に指定される
	一九二八・昭和3	満州事変起り、日中対立激化	十月人口五万人をこえる。町の花を「ひまわり」と決定
	一九三〇・昭和5		相武台東小学校創立
	一九三一・昭和6	五・一五事件、犬養首相暗殺	ひばりが丘小学校創立。十一月一日市制施行、人口六二、七四〇人となる
	一九三二・昭和7	日華事変起る	
	一九三七・昭和12		
	一九四一・昭和16	独ソ宣戦、太平洋戦争始まる	
	一九四五・昭和20	原子爆弾投下、太平洋戦争終る	
	一九四七・昭和21	日本国憲法公布される	
	一九四八・昭和23	教育基本法、学校教育法公布される	
	一九五〇・昭和25	朝鮮戦争起る	
	一九五三・昭和28	朝鮮戦争休戦。前年対日講和条約成立、日本独立を回復	
	一九五四・昭和29	前年国際連合に加盟	
	一九五七・昭和32		
	一九六二・昭和37	第一八回オリンピック東京大会開催	
	一九六四・昭和39		
	一九六六・昭和41		
	一九六八・昭和43	東名高速道路開通	
	一九七〇・昭和45	日本万国博覧会大坂にて開催	
	一九七一・昭和46		

高座郡座間村全畧圖

縮尺一萬二千分之一



各地ヘノ鐵道哩程													
東京	新宿	八王子	横濱	稲田登戸	新原町田	←座間驛		新座間驛→	海老名国分	相模厚木	小田原	茅ケ崎	鎌倉	横須賀
二九、五	二五、一	一六、二	一九、二	一三、三	二、八		一、四		一、四	三、八	二六、九	一三、二	二三、七	二九、七

（昭和２年作図のもの）